

第3部

男女別・年代別における絆意識についての実証研究

穂積 和子、錦織 孜、福德 貴朗

要 旨

本稿は絆の生成・維持・解消にいたるプロセスを検討するためにアンケートを設計し、データを収集し、データの分析をおこなった結果の報告である。この調査は、大学生と勤労者を対象としたものであり、グループ活動によって起こる絆を基本としている。

大学生を対象としたアンケート分析によって、絆の生成・維持・解消に関する研究においてはグループの絆を考えなければならないこと、また年代・性別・所属するグループの対象に分類して分析を行わなければならないこと等が明らかになった。

この結果から勤労者を対象としてグループ活動に対する「目的」と「効果」から求められる絆を分析した。人は個人の能力アップなどの目的を達成のために知らない人同士が集まっているグループで活動を始めたはずである。しかしグループ活動を行うことが「心の安らぎ」となり、他人への「思いやり」や他人への「奉仕」や他人との「繋がり」を感じるという傾向が見られた。また期待した「能力アップ」は、期待以上には達成できていないことも判明した。それら要因分析や構造分析のプロセスについて記している。

もう1つの勤労者対象のアンケートについては、グループ活動の目的と効果に加えてグループ活動の変化、参加者の働き方と満足度を追加して分析を行った。ここでは、「つながり」、「自己啓発」、「ストレス」、「働き甲斐」の因子が導き出された。55才～64才までの男性の勤労者は「働き甲斐」、45才～54才の勤労者は「つながり」に高因子得点をとった。女性の勤労者は35才～44才では「つながり」が最も高く、45才～54才は「自己啓発」が最も低かった。

これらの関係などについては第4部で報告される。

キーワード

絆、グループ活動、心の安らぎ、奉仕とつながり、能力アップ、自己啓発、働き甲斐

1. はじめに

絆研究にあたって研究課題として絆そのものについての研究や絆は管理できるかについての研究は難しく、筆者らは「絆の作用を高める研究」を開始することとした。

筆者らはこれらの絆に関する分析のために、4つの「絆」について調査を行った。1つは大学生を対象としたもの、1つは中高年者を対象としたもの、そして残り2つは勤労者を対象にしたものであり、第3部では、それらデータ分析のうち、大学生を対象とした第2章、勤労者を対象にした第3章と第4章で、その調査結果について述べる。

勤労者を対象とした分析の第3章は2016年秋に日本情報経営学会の全国大会で発表したもの(穂積、福德、錦織、2016)を書き改めたものである。2つめの勤労者に対する調査は、第4部の分析データのもととなるため、単純分析のみを紹介する。

本稿はこれら調査データが、絆研究の基礎データとなることを期待するものである。

2. 大学生の「絆」に対する意識

大学生対象のアンケート調査は、本研究プロジェクト開始時に我々が明らかにしようとした点を事前に調査する目的として行ったものである。それらは、絆の形成や維持に必要な条件は何か、絆の存続と情報技術がどのような影響を与えるか、である。

大学生の人と人との繋がり方は、LINEを用いて、LINEグループ内での友人たちとの会話、SNS (Social Networking Service: ソーシャル・ネットワーキング・サービス) のツイッターやFaceBookでのつながりなど、ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) を介した友人とのつながり

方が多い。一方で大学生は、リア充（注1）という言葉に代表されるようにSNSに参加し続けるという大変な作業から解放されて、リアルな生活を充実させたいという願望もある。しかし、実際にはバーチャルな世界から離れることはできない。また、多くの大学生は大学生活の中で、サークルやクラブ活動に参加し、リアルのグループ活動を体験している。

本稿ではこれらリアルの世界で、大学生が人と人とのコミュニケーションをどのように築いているか、また「絆」に対してどのようなイメージを持っているかについて調査分析を行う。

2.1 アンケート調査の概要

(1) 調査対象者

アンケート回答の信頼性を高めるため、神奈川大学経営学部の筆者の複数のクラスの受講生に対して、分析目的の説明を事前に行い、かつ回答について1問ずつ説明を行いながら、Web上のアンケートへ回答してもらった。対象は神奈川大学湘南平塚キャンパス経営学部2、3年生で回答は160枚、そのうち、有効枚数は148枚であった。調査は、2015年12月10日～2016年1月17日の間に実施された。学生の年齢は19才～23才までで、性別の回答者割合は男性65%、女性35%であった。

(2) 調査の概要

以下の項目について選択肢に回答してもらった。詳細については、「参考文献1 大学生に対するアンケート」を参照のこと。

- ・ 他人への信頼について
- ・ 日常的な付き合いについて
- ・ 参加しているグループ活動について
- ・ グループ活動で辞めなくなった時の理由について
- ・ グループ活動のプラス効果とマイナス効果について
- ・ 絆や連帯を感じた対象について
- ・ 絆の重要性
- ・ 絆についてのイメージ

- ・ 情報機器の利用について

2.2 他人への信頼について

稲葉らは他人への信頼についての全国的な調査を行いその分析を報告している（注2）。そこでは、「旅先」や「見知らぬ土地」で出会う人に対して、人は信頼できますかという質問があり、郵送調査の場合、「ほとんどの人は信頼できる」と回答した割合は全体で24.8%であったという。

本アンケートでは、「自分の周りに居る人との信頼関係を築きやすい（以後パーソナルな信頼関係と呼ぶ）」と「初めて出会う人との信頼関係を築ける（以後一般的な信頼関係と呼ぶ）」の質問項目について5件法で回答を求めた。比較方法が異なるため単純な比較はできないが、「普通に築ける」と「すごく築ける」の合計はパーソナルな信頼関係では68%、一般的な信頼関係は43%であった。まだ小中高などの学校での生活しか送っていない大学生にとってパーソナルな信頼関係でも一般的な信頼関係でも他人に対する信頼関係は高いものと考えられる。大学生の信頼関係の築きやすさについての回答結果を図2-1に全体の人数における割合の比較として示す。

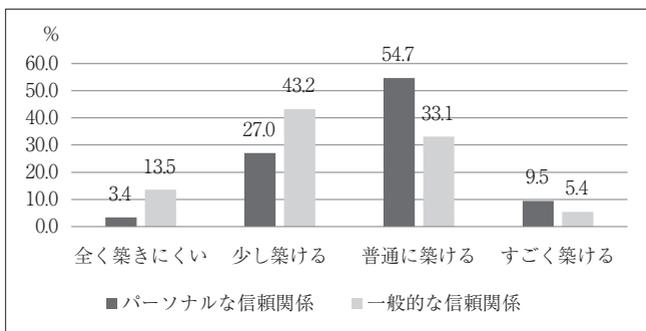


図2-1 信頼関係の築きやすさ比較（身近な人と初めての人）

次にこの2つの信頼関係についてt検定を行った結果は、「パーソナルな信頼関係」と「一般的な信頼関係」では異なった。自由度121でt値は4.722、0.1%水準で有意に差があった。表2-1は2つの信頼関係の築き易さの平均と標準

偏差である。

表2-1 信頼関係の築き易さの平均と標準偏差

信頼関係 (N = 152)		平均値	標準偏差
問3	パーソナルな人間関係	2.77	0.704
問4	一般的な信頼関係	2.43	0.896

2.3 絆に対するイメージ

「絆を大事」とすごく感じた、または少し感じた学生は合計で76%を超えている。「絆を思い出したくない」学生も同様の集計で34%であった。

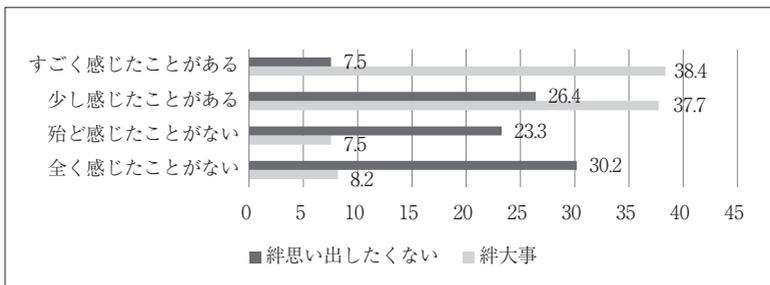


図2-2 絆に対するイメージ (パーセント)

絆を「大事と考えている」と、「思い出したくない」とを同時に考えているかについて検討した。「大事と考えている」から「思い出したくない」との差を求めて新しい変数を作成した。この変数が負の値になると、絆は「大事」より「思い出したくない」が強い傾向にあるものであり、図2-3にその集計を示した。

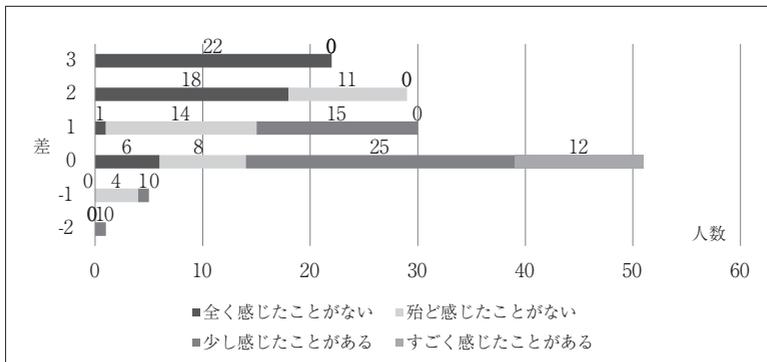


図2-3 絆は「大事」と「思い出したくない」との関係

差の0は「大事」と「思い出したくない」が同じ程度であり、これが全体の37%を占める。また、正の値は59%を占め、絆を「思い出したくない」より「大事」と感じている人数が差の0の値を含めると95%になった。

2.4 「絆」のイメージについて

絆という言葉聞いたときに想像すると考えられる20個の用語について5件法（(1) 全く想像しない、(2) ほとんど想像しない、(3) 少し想像する、(4) すごく想像する、(5) 分からない）で回答を得た。(5)の回答データを除いたデータを用いて最尤法による因子分析を行った。固有値の変化は9.09、3.02、1.63、.897・・・であり、因子の可能性から3因子構造を採用した。再度3因子を仮定して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。他の因子に大きな因子負荷量を示した4項目を分析対象から除外して再度行った結果の因子パターンと因子間相関を表2-2に示す。尚、回転前の3因子で16項目の全分散を説明する割合は71.3%であった。

表2-2 絆に対するイメージ 因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

	I	II	III	因子名
協力	.911	-.149	.031	助け合い
助け合い	.900	-.091	.037	
仲間	.880	.015	-.118	
繋がる	.742	.032	.030	
信頼	.651	.229	-.115	
親子	.484	.137	.155	
楽しい	-.094	.998	-.062	幸せ
嬉しい	-.051	.984	-.079	
幸せ	.182	.680	-.035	
安全	.048	.540	.223	
心強い	.309	.539	.014	
糸口	-.117	.502	.300	
嫌な	-.110	.033	.942	嫌な
面倒くさい	.082	-.117	.931	
煩わしい	-.062	.042	.892	
ボランティア	.279	.098	.490	
因子間相関	I	II	III	
I	—	.562	.207	
II		—	.392	
III			—	

第一因子は協力、助け合い、仲間、つながるなどの6項目からなり、「助け合い」因子と命名した。第二因子は嬉しい、楽しい、幸せ、安全などの6項目からなり「幸せ」因子、第三因子は嫌な、煩わしいなどの4項目からなり、「嫌な」因子と名付けた。

因子分析の結果の各因子に高い負荷量を示した項目の平均得点を計算して、下位尺度得点とした。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表2-3 下位尺度間の相関と平均

	助け合い因子	幸せ因子	嫌な因子	平均	標準偏差
助け合い因子	—	.572**	.264**	3.45	0.65
幸せ因子		—	.473**	3.12	0.74
嫌な因子			—	2.44	0.90

**p<.001

因子得点からクラスターの数を3としてクラスター分析を行った。その結果は図2-4のとおりである。

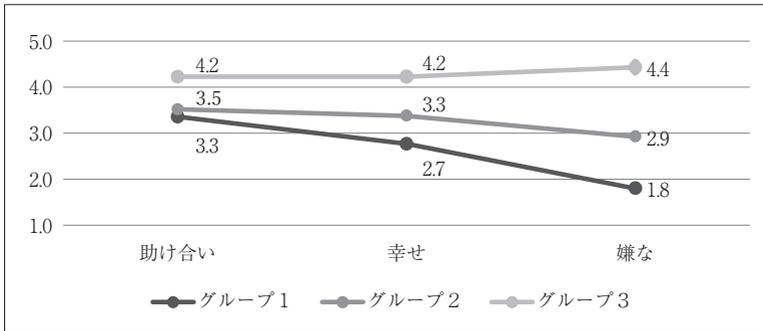


図2-4 クラスター分析結果

グループ1には64名、グループ2は53名、グループ3は11名であった。グループ1は嫌な因子得点が低く「絆は助け合い」グループというイメージであり、全体の50%の学生がそのグループに所属した。グループ2は「絆は助け合って幸せ」グループというイメージで41%の学生が所属した。グループ3は「絆は嫌なもの」グループであり、9%の学生が所属した。

得られた3つのクラスターを独立変数、「助け合い」「幸せ」「嫌な」を従属変数として分散分析を行った。その結果、全ての項目に群間差がみられた（助け合い： $F(2,125)=9.39$ 、幸せ： $F(2,125)=33.36$ 、嫌な： $F(2,125)=194.24$ 、ともに $p<.001$ ）。TurkeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った所、「助け合い」のみグループ1とグループ2で有意な差が無く、他は全て有意な差があった。

絆に対して良いイメージを持っている人、悪いイメージを持っている人も共に助け合いの因子は同様に持っていることが分かる。

2.5 「パーソナルな信頼」と「一般の信頼」で絆のイメージに差があるか

2.2で述べた信頼の築き易さについての分析である。

絆を全く築きにくいと考えている学生のデータを0とし、少しでも築ければ1とするデータを作成して、「パーソナルな信頼」の場合と、「一般的な信頼」の場合に分けて、2.4で求めた絆に対するイメージの差を調査した。

表2-4は全く絆を築きにくい学生と築き易い学生の「パーソナルな信頼」と「一般的な信頼」の因子得点の平均と標準偏差である。

表2-4 パーソナルな信頼と一般的な信頼の因子得点平均と標準偏差

因子名	築きやすさ	パーソナルな信頼			一般的な信頼		
		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
助け合い	築きにくい	9	2.91	1.15	26	3.59	0.79
	築き易い	128	3.48	0.59	112	3.43	0.57
幸せ	築きにくい	9	2.33	1.09	25	3.08	1.00
	築き易い	123	3.17	0.69	110	3.15	0.65
嫌な	築きにくい	9	2.08	1.05	25	2.52	1.16
	築き易い	126	2.46	0.90	112	2.43	0.83

信頼関係を築き易い学生は「助け合い」「幸せ」「嫌な」因子について、「パーソナルな信頼」も「一般的な信頼」も差は無い。しかし信頼関係を築きにくい学生にとっては「助け合い」と「幸せ」について「パーソナルな信頼」と「一般的な信頼」について差がある。

2.6 情報機器利用媒体とネットの利用時間と「絆」

ここでは、ネットで絆は作れるかについて検討するために、学生の情報機器やネットの利用状況について調査した。

利用回数の最も多い情報機器は、学生の7割以上がスマホの利用であり、次は11%のパソコンであった（図2-5）。

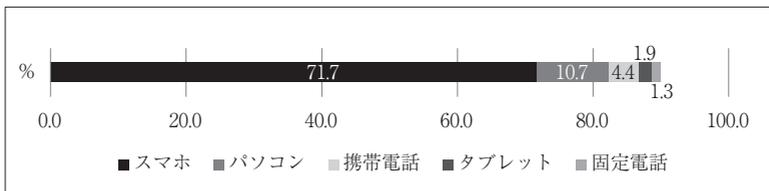


図2-5 学生の最も利用する情報通信機器

これらの情報機器のうちスマホとパソコンを使っている学生が、ネット上の絆について作成・期待・維持・切断できるかについて4件法で調査した結果の平均点を表2-5に示す。

表2-5 ネット上の絆と利用情報機器

情報機器と絆	平均	
	スマホ	パソコン
問40_ネットで絆を作れるか	2.42	2.75
問41_ネットで絆を作りたいか	2.17	2.44
問42_ネットで絆を維持できるか	2.26	2.44
問43_ネットで絆を切れるか	2.16	2.31

パソコンをもっとも多く利用していると回答した学生は少なく、ネットで絆に関する4つの質問項目に対して情報機器の種類による有意差はなかった。しかしスマホを利用する学生よりパソコンを利用する学生の方が絆の生成・維持・解除の全ての項目でスマホより高い傾向が見えた。これはパソコンを利用する学生の方が長い時間に渡ってネットにつながっている可能性が有るためと考えられる（表2-6）。

表2-6 情報機器利用の多い機器の1日の利用時間

種類 \ 時間	10分以内	10-30分	30分-1時間	1-2時間	2-3時間	それ以上
スマホ	4%	5%	6%	25%	33%	26%
パソコン	0%	7%	7%	33%	13%	40%

ネットで絆を作るためには情報機器の使用時間が関係すると考えられる。そこで1日のネット利用時間数と絆の生成・維持・解除について、使用時間との χ^2 乗検定を行ったところ、4つの全ての場合において、有意差は無かった。

全体として、ネットの利用情報機器やネット利用時間が絆の維持・生成・解除に関係することは無いことが分かった。しかし実際にリアルに活動をしている時間が絆感情の維持・生成・解除に影響しているとも思えない。

2.7 どのようなときに「絆」を感じるか

どのような時に絆を感じるかについて調査した結果、全体のうちの37%の学生が絆を強く感じたことがあると回答した。その内容は、「運動部や文化部、生徒会などのグループ活動で一緒に頑張ったとき」が55%、「バイト先や塾、家、大学などで、友人や親が精神的、肉体的に助けてくれたときや励ましてくれるとき」が45%であった。前者の場合は、グループ活動など協同で一つの目標を達成するための活動中に絆を感じている。

絆を一番感じたグループ活動の内容は、図2-6のように、体育系と文化系のサークルの2つで5割を超え、それに同窓会が続き、ボランティアや地域活動は入っていない。体育系や文化系のグループの多くは高校時代のクラブ活動が多く、与えられたグループ活動の中で絆という感情が芽生えていったと考えられる。

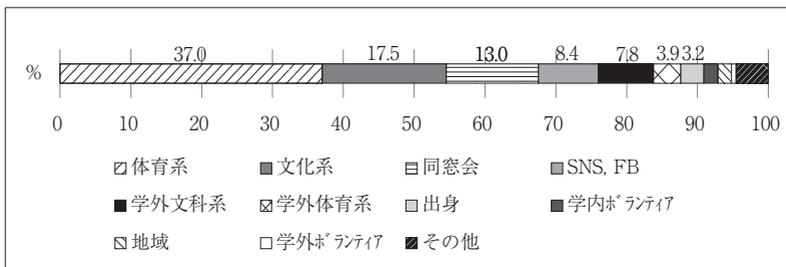


図2-6 絆を強く感じた時のグループ活動

学生が強く絆を感じる時のうち前者は、グループ活動を通して共通の目標を達成するために協力して、作業や練習を行う場合である。そこにはそのグループの明らかな達成目標があり、個人個人が自分の役割を考えながら1つの成果を求めている。活動が終わったら、グループ活動は解散するので、絆の感情は過去のものとなる。

後者は友人、知人、親族、教師などへの絆の感情である。これは、一方的に精神的・肉体的に相手から援助を受けることで芽生える。ただし、友情と考えるか絆と考えるかについては明確には分けられない。しかし援助された

者は恩義を感じ、その援助者に対する信頼ないしは絆となる。これは援助者に対しての一方的なものとなる可能性が高く、困難が解消しても、絆意識は継続されることが考えられる。

2.8 大学生の「絆」に関する考え方について

以下に2章で分析したことをまとめた。

- ・注2で利用した内閣府が行った全国的な調査と比較して、大学生は容易に信頼関係を築くことができる。
- ・絆を感じる時はクラブやサークル活動の際に1つの目標に向かって行う共同作業の結果として感じたものであり、目標がある間は維持され、目標が終了すれば解消する絆と考えられる。
- ・絆に対しては「思い出したくない」絆もあるが絆そのものは「大事」であるとの回答が95%であった。
- ・絆のイメージを分析した結果、「助け合い」「幸せ」「わずらわしい」という因子が抽出できた。因子得点を求めてグループ化した結果は「絆は助け合い」や「絆は助け合って幸せなもの」の2つの群に91%の学生が所属した。「絆は嫌」というグループに所属する学生も「助け合い」得点は高いものであった。
- ・絆の概念そのものが人によって異なるため、本章では、絆を築きやすいか築きにくいかで分析した。絆を築きにくいと答えた学生は全体の7%であり、パーソナルな信頼においては築きやすい学生と比較して「助け合い」と「幸せ」得点に差があったのに対して、一般的な信頼においては、どの得点も共に有意差は無かった。一般的な信頼に対しては絆を築きやすいか否かにかかわらず「助け合い」「幸せ」「嫌な」の得点は変わらない。
- ・絆は情報機器の利用によって作れるかについては、作れないし、それは情報機器の種類や利用時間でも異ならない。

ここに示してきた大学生を対象とした分析結果は、一般論として示せるものではない。本章で得られた知見を生かして、以後の分析を深めていく。

ここで明らかになった点は、絆の対象がグループであるか、個人であるか

を分けて分析しなければならないことである。また他人への信頼について内閣府で行った結果と今回の結果が大きく異なった理由は、対象が若者であるか、全ての層を網羅しているかの違いである。従って、年代別や性別で分析していくことが必要である。

また分析としては明らかになっていないが、絆を感じる時の場合はグループ活動の場であり、それは主体的に所属しているものもあれば、そうでない場合もある。グループ活動は人と人とのコミュニケーションの上に成り立つものであり、主体的にグループ活動を行うことによって絆意識を得ることができると考えられる。その絆意識はどのようなものから構成されているかについての調査が今後必要となる。

3. 勤労者の「絆」に対する意識調査

2章で大学生に対する絆意識の調査から、絆分析の対象をグループにすることが必要であること、またグループ活動の対象を与えられたものでは無く、主体的に目的を持って活動することが必要であることについて述べてきた。

本章では、グループ活動を主体的に行っている勤労者を対象として調査分析を行った結果について述べる。

3.1 アンケート調査の概要

(1) 調査対象者

アンケートはNTTコム オンライン・マーケティング・ソリューション(株)のネットリサーチに依頼して行った。調査対象は都市部に住む30代～50代の勤労者で、過去または現在、グループ活動を行っていたことがある306名が対象である。調査は2016年2月29日～3月1日に、Webアンケート調査方式で行った。回答者の属性の内訳は男性234名(30代57名、40代87名、50代90名)、女性72名(30代41名、40代16名、50代15名)であった。

(2) 調査の概要

以下の項目について回答してもらった。詳細については「参考資料2 勤労者に対するアンケート」を参照のこと。

- ・ 過去または現在に行ったグループ活動の内容（複数回答）
- ・ 最も熱心に活動したグループの内容
- ・ その活動に期待したこと
- ・ その活動に参加して得られた効果
- ・ グループ活動の期間、グループ人数、活動頻度、活動を終了する理由
- ・ 個人の属性としては、性格、普段のコミュニケーション手段、性別、学歴、雇用形態、職業、通勤時間、世帯年収、世帯種類など。

グループ活動の内容については事前に職場の人たちの協力ののもとに活動内容を記入してもらい、その内容と人間のライフサイクルを考慮して、候補一覧として12個のグループを選択した。最終的には、(1) 健康、(2) 仕事、(3) 趣味／教養、(4) ボランティア、(5) 自治会、(6) 子育て／介護、(7) 同窓会／その他に分類した。

グループ活動に期待した項目は15項目、活動して得た効果の項目は24項目で有り、回答は（(1) まったく当てはまらない、(2) ほとんど当てはまらない、(3) どちらともいえない、(4) まあ当てはまる、(5) よく当てはまる）の5件法を利用した。

3.2 勤労者アンケートの集計概要

(1) 現在または過去に熱心に活動していたグループ活動の内容

現在活動中のグループ活動の多い順は仕事知識、健康増進、趣味であり、合計で46%を占める。一番熱心に活動したグループは、趣味、健康維持、仕事知識の順であり、この3つで60%を占める。さらにボランティアのグループ参加が7%あった。

(2) 活動グループの個数と利用

回答者らのグループ活動への参加の個数は現在で平均1.2個、過去で1.6個であった。

(3) 分野別グループ活動年数

健康増進が一番長く、平均で8.8年、趣味教養が7.9年、次に自治会やボランティアの6.1年、仕事関連の社会的参加は5.1年で、子育て介護が4.5年である。

(4) グループ活動の頻度

健康増進やママ友は週単位で活動するが、仕事は月に1回程度、趣味などは年に数回。ボランティアは月に2～3回と少し高い。

(5) オンライン・ソーシャル・ネットワーキングサービス（SNS）への参加割合

地域のSC（Social Capital：人間関係資本）（注3）にかかわる活動に参加する人達、特にボランティアを行っている人は、SNSの利用が積極的であるという。今回の調査ではSNSなどのオンラインコミュニティへの参加者は全体の11%であり、77%の人が現在は所属していない。年代別にみても若い世代と他の世代で有意な差はなかった。

(6) コミュニケーションに用いる手段

調査対象者の仕事以外でのコミュニケーション手段としては、パソコンメールを8割の人が利用し、SNSへも4割程度が参加している。この結果は情報通信白書（2015）の数値とほぼ同じである。

3.3 性別・年代別のグループ活動について

目的を持って活動しているグループ活動の内容は、その年代、性別によって異なる。図3-1と図3-2に示したように、男性と女性では、上位5位までの比較によっても男性が仕事、健康、同窓会、仕事ネットワーク、趣味の順であるのに対して、女性の上位5位の順は健康、仕事、趣味、同窓、ボランティアである。

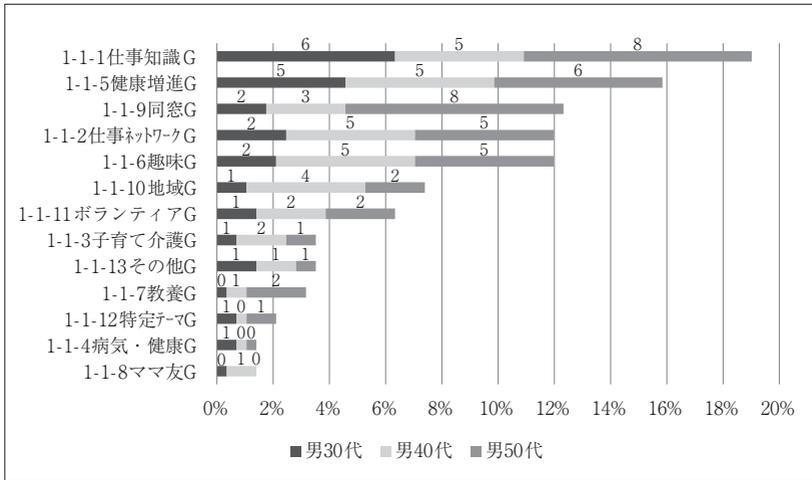


図3-1 男性の年代別グループ活動

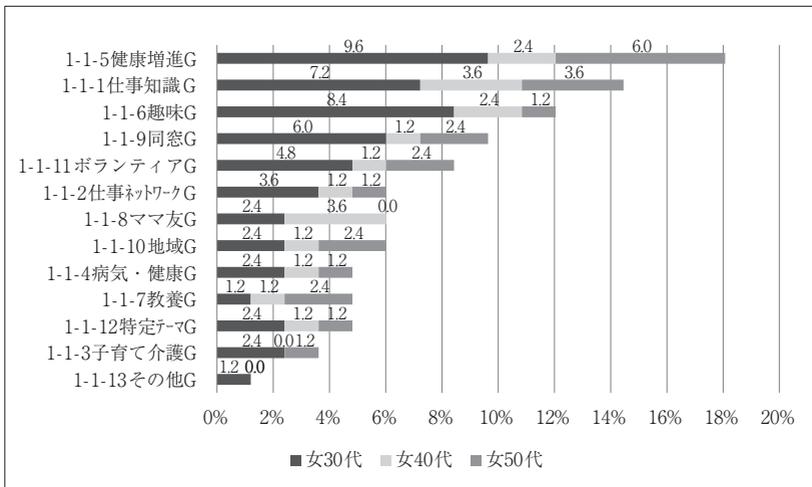


図3-2 女性の年代別グループ活動

本報告では、今後の分析を性別、年代別に分けて分析していく。

3.4 グループ活動に参加する期待とその結果として得られた効果

人が主体的にグループ活動に参加するということは、何らかの目的を持ってその効果を期待して活動すると考えられる。ここでは、期待項目と効果項目に関してどのような関係があるかについて明らかにすることを目的にまずアンケート回答者全員を対象として分析した。

全回答者に対してグループ活動への15個の期待項目に対して因子分析を行った。最尤法、Promax回転後の因子は3つとなり、表3-1に示したように第一因子名は「心のやすらぎ」（5項目）、第二因子は「能力アップ」（3項目）、第三因子は「奉仕とつながり」（3項目）と命名した。分析の段階で4項目を除外して11項目として求めた。なお、回転前の3因子11項目で全分散を説明する割合は64.48%であった。

表3-1 期待に関する因子分析結果

	因子			因子名
	I	II	III	
8-6 同趣味人とつきあう	0.879	-0.018	-0.058	心の やすらぎ
8-7 興味趣味を深める	0.871	0.186	-0.152	
8-9 楽しい時間を作る	0.805	-0.113	0.089	
8-8 充実した時間を作る	0.765	0.041	0.063	
8-5 付き合いを深める	0.554	-0.067	0.131	
8-1 能力向上期待	0.033	0.843	-0.076	能力 アップ
8-2 目標達成期待	0.024	0.777	0.078	
8-3 新知識手法期待	-0.048	0.715	0.079	
8-12 他人のためになることで満足	0.03	-0.017	0.917	奉仕と つながり
8-13 社会のためになることで満足	-0.149	0.166	0.784	
8-11 他人と一緒にいることで満足	0.28	-0.091	0.611	
因子間相関	I	II	III	
I	—	0.238	0.241	
II		—	0.358	
III			—	

同様に24項目の効果項目について行った因子分析の結果は表3-2のようになった。

表3-2 効果に対する因子分析結果

	因子			因子名
	I	II	III	
9-11 楽しい時間を過ごせた	0.874	-0.164	0.026	心の やすらぎ
9-8 同じ趣味の人と付き合えた	0.864	0.059	-0.133	
9-10 充実した時間を過ごせた	0.811	-0.021	0.005	
9-9 趣味興味深まる	0.759	0.259	-0.182	
9-7 知人友人との付き合い深まる	0.684	-0.074	0.131	
9-6 新しい知人を得た	0.558	0.150	0.071	
9-12 一人で不可能なこと実現	0.546	-0.052	0.239	
9-3 目標達成できた	-0.030	0.881	0.011	能力 アップ
9-1 能力向上した	0.076	0.861	-0.119	
9-2 新能力発見した	0.047	0.848	-0.007	
9-4 新しい目標を見つけた	0.074	0.798	0.037	
9-5 新しい有用な知識を得た	0.172	0.639	-0.011	
9-23 仕事に役立つ情報を得た	-0.235	0.526	0.300	
9-24 仕事に役立つネットワークを得た	-0.203	0.495	0.349	奉仕と つながり
9-15 社会のためになることで満足感	-0.113	-0.006	0.912	
9-19 活動が会社で認められた	-0.206	0.128	0.812	
9-14 他人のためになることで満足感	0.145	-0.067	0.791	
9-13 安心感を得た	0.324	-0.126	0.634	
9-18 活動が会員に認められた	0.065	0.182	0.603	
9-20 他の人との強い繋がり	0.214	0.025	0.599	
9-21 他の人との弱い繋がり	0.018	-0.015	0.545	
9-16 身体的健康を得た	0.279	0.190	0.352	
因子間相関	I	II	III	
I	—	0.388	0.401	
II		—	0.597	
III			—	

各因子の内的整合性を確認の後、各因子名に対して因子項目毎の平均点として下位尺度を作成した。その平均と標準偏差を男女別・年代別に求めたのが、表3-3である。

表3-3 因子得点の平均と標準偏差

		因子項目	因子得点	
			平均	標準偏差
目的	男性	心の安らぎ	2.24	0.79
		能力アップ	2.51	0.91
		奉仕とつながり	2.98	0.87
	女性	心の安らぎ	2.01	0.75
		能力アップ	2.34	0.85
		奉仕とつながり	2.80	1.00
効果	男性	心の安らぎ	2.30	0.71
		能力アップ	2.73	0.78
		奉仕とつながり	2.89	0.75
	女性	心の安らぎ	2.08	0.76
		能力アップ	2.68	0.86
		奉仕とつながり	2.78	0.88

3.5 グループ活動への参加についての男女別年代別因子分析結果

(1) 期待項目に対する男女別・年代別分析

男女別、年代別（30代・40代・50代）について、「期待」項目に対する分析を行った。分析方法は全体で行ったものと同様で、最尤法で行い、各因子に対する因子負荷量が0.35以下のもの、また他の因子に0.35以上の負荷を与えている項目を除外して分析を行った。男性も女性も年代別も全て「心の安らぎ」「能力アップ」「奉仕とつながり」因子が導出できた。それらの因子について因子間相関を求め、男女別を表3-4に、年代別を表3-5に示した。

表3-4 男女別の期待項目についての因子間相関

		因子	因子名	因子相関行列			項目数
				心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	
男性	第一	心の安らぎ	—	.124	.187	5	
	第二	能力アップ		—	.376	4	
	第三	奉仕とつながり			—	3	
		因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	項目数
女性	第一	心の安らぎ	—	.331	.194	7	
	第二	能力アップ		—	.346	3	
	第三	奉仕とつながり			—	4	

表3-5 年代別の期待項目についての因子間相関

	因子	因子名	因子相関行列			項目数
			心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	
30代	第一	心の安らぎ	—	.259	.191	6
	第二	能力アップ		—	.327	3
	第三	奉仕とつながり			—	5
	因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	項目数
40代	第一	心の安らぎ	—	.131	.349	5
	第二	能力アップ		—	.448	5
	第三	奉仕とつながり			—	4
	因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	項目数
50代	第一	心の安らぎ	—	.129	.078	5
	第二	能力アップ		—	.287	4
	第三	奉仕とつながり			—	2

女性は「心の安らぎ」因子と「能力アップ」因子、「奉仕とつながり」因子と「能力アップ」因子で相関があり、男性に比べて女性は「能力アップ」因子と「奉仕とつながり」因子が他と比較して相関が強い。40代については、「能力アップ」因子と「奉仕とつながり」にかなり相関があった。50代については、ほとんどの因子間相関は他の年代と比較して低かった。

(2) 効果についての男女別・年代別分析

同様に男女別・年代別の効果について分析した結果が表3-6と表3-7である。効果については、男女別では期待と同様に3つの因子が導出された。内容的には多少異なるものの、因子名をわかりやすくするため、期待項目と同じ名前とした。ただし、30代についてのみ、4因子となり、新たな因子を「仕事情報」と命名して利用した。

表3-6 男女別効果項目についての因子間相関

		因子間相関行列			項目数	
	因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ		奉仕とつながり
男性	第一	心の安らぎ	—	.365	.382	9
	第二	能力アップ		—	.574	8
	第三	奉仕とつながり			—	8
	因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	項目数
女性	第一	心の安らぎ	—	.372	.373	7
	第二	能力アップ		—	.687	8
	第三	奉仕とつながり			—	9

男女別の効果項目でかなり相関があったのは、男性の「能力アップ」因子と「奉仕とつながり」因子で、0.547であった。さらに女性は「能力アップ」因子と「奉仕とつながり」因子が、0.687の相関となった。効果としては、男性も女性も「能力アップ」をめざしてグループ活動を行っていたが、それが他人のため、社会のためという「奉仕」とつながっているという傾向を見ることができた。

年代別では、30代の勤労者のみ4つの因子が導出でき、それらは「心の安らぎ」「能力アップ」「奉仕とつながり」と「仕事情報」の因子であった。「仕事情報」因子と名づけた内容は、「9-23仕事に役立つ情報を得た」、「9-24仕事に役立つネットワークを得た」、「9-17仕事や将来方向が見つかった」であった。30代の勤労者は他の年代と異なり、仕事上の成果への効果が得られたものと考えられる。

表3-7 年代別効果項目についての因子間相関

	因子	因子名	因子間相関行列				項目数
			心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	仕事情報	
30代	第一	心の安らぎ	－	.393	.341	.090	7
	第二	能力アップ		－	.667	.536	5
	第三	奉仕とつながり			－	.568	7
	第四	仕事情報				－	3
	因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	項目数	
40代	第一	心の安らぎ	－	.341	.667	7	
	第二	能力アップ		－	.393	6	
	第三	奉仕とつながり			－	5	
	因子	因子名	心の安らぎ	能力アップ	奉仕とつながり	項目数	
50代	第一	心の安らぎ	－	.392	.425	7	
	第二	能力アップ		－	.543	5	
	第三	奉仕とつながり			－	5	

年代別では、どの年代も「奉仕とつながり」と「能力アップ」の相関が特に大きく、その他の相関も大きい。40代の勤労者の「心の安らぎ」は「奉仕とつながり」と大きく関係している。

3.6 グループ活動参加の目的因子と効果因子の関係

グループ活動の目的因子と効果因子についてその関係を調査する目的で、因子得点による構造分析を行った。前項では、グループ活動への参加について、期待と、その効果に分けて、それぞれに3つの因子を抽出した。グループ活動参加における期待は、時系列で考えれば、グループ活動参加前に持っていた参加目的と考えることができる。しかし、グループ活動参加によって、グループ活動参加前に持っていた期待、目的通りの効果が得られるとは限らない。また、グループ活動参加によって、グループ活動参加前に持っていた期待、目的とは別の、新たな効果が得られることも考えられる。そこで、グループ活動参加における目的の3因子と、グループ活動参加における効果の3因子をそれぞれ直接につないだパス図を作成し、IBM SPSS AMOS（注4）で分析をおこなった。ここで、パス図左側のMTは目的因子を表しており、パス図右側のKTは効果因子を表している。MTのMは「目的」を意味しており、KTのKは「効果」である。

(1) グループ活動参加の目的と効果の関係

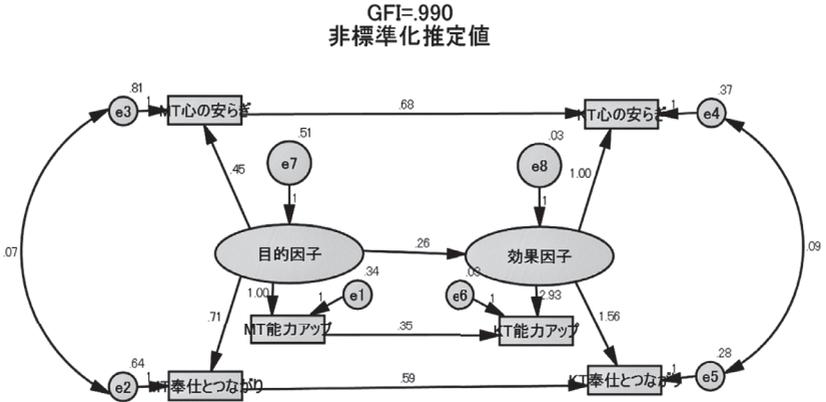


図 3-3 グループ活動参加の目的 3 因子と効果 3 因子のパス図

モデル適合度をあらわす GFI は 0.990 であり、基準値 0.9 を上回っている。また、それぞれの係数はすべて正であり、目的因子から効果因子へ正の影響があることがわかる。次に目的側、効果側の 3 因子をそれぞれにつなぐパス係数の統計的有意差の有無を確認する。

表 3-8 グループ活動参加の目的 3 因子から効果 3 因子へつなぐパス係数の統計的有意性

スカラー推定値 (全体-モデル番号 1)

最尤 (ML) 推定値

係数 : (全体-モデル番号 1)

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
KT心の安らぎ	<--- MT心の安らぎ	0.678	0.038	17.941	***
KT能力アップ	<--- MT能力アップ	0.354	0.278	1.273	0.203
KT奉仕とつながり	<--- MT奉仕とつながり	0.59	0.056	10.578	***

すると、グループ活動参加の目的として、われわれが抽出して名づけた「心の安らぎ」、および「奉仕とつながり」の2つの因子は、目的から同じ名前の効果へ正の係数が観測され、それぞれの確率は0.001未満であり、統計的有意差が確認できた。これにより、グループ活動参加の目的は、グループ活動参加後に感じた効果と、この2つの因子においては合致することがわかった。しかし、抽出した3因子の中で「能力アップ」だけは、目的因子から同じ名前をつけた効果因子への正の係数の確率が0.203であり、統計的有意差が確認できなかった。この要因として、次のような仮説を考えた。グループ活動の参加者は、自分の能力アップという自己利益に関する目的をグループ活動参加前に期待していても、グループ活動参加によって他人と交わることで、「奉仕とつながり」と名付けた効果、あるいは「心の安らぎ」と名付けた事前の目的とは別の効果を新たに発見するのではないか。つまり、単にグループ活動参加前に持っていた目的に対して、グループ活動参加後に目的と同じ効果を感じるだけではなく、新たなグループ活動の効果を見出す。特にグループ活動参加前の個人レベルでは、グループ活動参加前に抱く目的は自分の能力アップといった自己利益的なものであっても、グループ活動参加後、他人との交流によって、グループ活動参加前には予測しなかった他人への奉仕とつながり、それによって得られる心の安らぎを最終的に感じるのではないかと考えた。

(2) グループ活動参加の効果因子間の関係－全体

前項の仮説をもとに、抽出したグループ活動参加の効果の3因子の間でどのような関係性が成立するのか。図3-3と同様にAMOSでパス図を作成し、分析をおこなった。

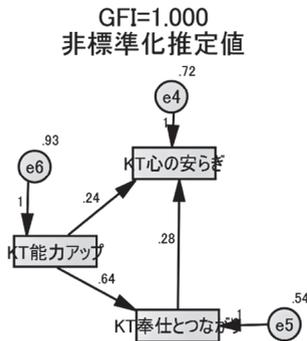


図3-4 グループ活動参加の効果因子間の関係

すると、能力アップの効果因子を出発点とし、最終的に心の安らぎの効果因子へと向かうパス図が作成できた。パス図の適合性を表すGFIは1.000であり、基準値0.9を上回った。パス図の中のパス係数はすべて正の係数であり、「KT能力アップ」から「KT心の安らぎ」、「KT奉仕とつながり」へ正の影響が確認できた。また、「KT能力アップ」から「KT心の安らぎ」へは、直接効果と、「KT能力アップ」から「KT奉仕とつながり」を経て「KT心の安らぎ」へと向かう間接効果の2つの経路が確認できた。この3つのパス係数の統計的有意性を表3-8で表した。

表3-9 グループ活動参加の効果因子間のパス係数の統計的有意性

スカラー推定値（全年代-モデル番号1）

最尤（ML）推定値

係数：（全年代-モデル番号1）

	推定値	標準誤差	検定統計量	確率
KT奉仕と つながり <--- KT能力 アップ	0.638	0.044	14.593	***
KT心の 安らぎ <--- KT奉仕と つながり	0.277	0.066	4.194	***
KT心の 安らぎ <--- KT能力 アップ	0.239	0.066	3.647	***

それぞれのパス係数はすべて、確率が0.001未満であり、統計的に有意であることが確認できた。この結果より、以下の2つの点が確認できた。

- ・能力アップの効果因子、及び奉仕とつながりの効果因子が心の安らぎの効果因子に正の影響を与えている
- ・能力アップの効果因子から心の安らぎの効果因子への正の影響は、直接効果と、奉仕とつながりの効果因子を経る間接効果の2つの経路がある

よって、前項に述べた仮説の通り、グループ活動参加によって自分の能力アップの効果を感じることは、単にその効果の実感だけでなく、奉仕とつながりといった効果や、さらにはそれによって心の安らぎという効果の認識に正の影響を与えることがわかった。

(3) グループ活動参加の効果因子間の関係 - 男女別

前項の分析を踏まえて、グループ活動参加における効果の3因子の関係性に、男女間の性差があるのかを確認した。図3-5が男性の回答者のデータ、図3-6が女性の回答者のデータである。

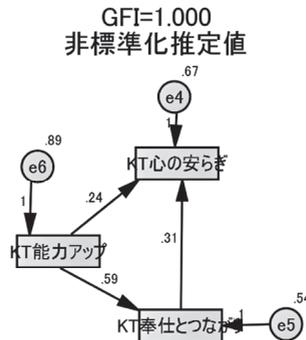


図3-5 グループ活動参加の効果因子間の関係（男性）

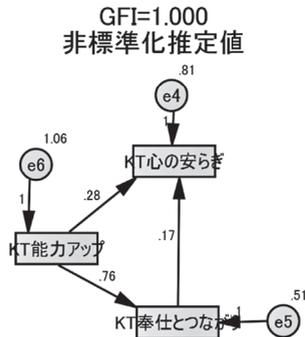


図3-6 グループ活動参加の効果因子間の関係（女性）

男女共に、それぞれのパス係数はすべて正であり、パス図の適合性を表すGFIは1.000で基準値0.9を上回った。それぞれのパス係数の値をみると、非標準化推定値のため、係数の単純な比較はできないが、男性よりも女性のほうが、グループ活動参加による能力アップの効果の実感が、奉仕とつながりの効果を実感に影響を与える度合いが高い。逆に、奉仕とつながりの効果を実感しても、そこから心の安らぎの効果の実感に与える影響度は、女性は男性よりも低い。この能力アップから奉仕とつながりへのパス係数の値の男女差の統計的有意性を確認するため、パラメータ間の差に対する検定統計量をみると、有意水準0.05とすると絶対値で1.96を超える必要があるが、1.771で足りず、パス係数の値の男女差に統計的有意差は確認できなかった。

(4) グループ活動参加の効果因子間の関係－年代別

次に、同じパス図を用いて、グループ活動参加における効果の3因子の関係性に、年代別の差があるのかを確認した。図3-7が30代の回答者のデータ、図3-8が40代の回答者のデータ、図3-9が50代の回答者のデータである。

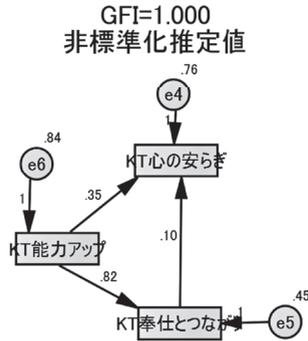


図 3-7 グループ活動参加の効果因子間の関係（30代）

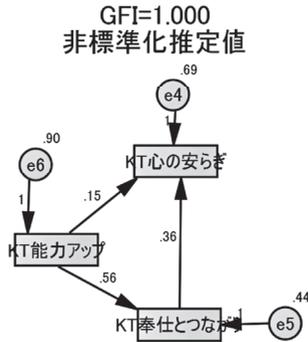


図 3-8 グループ活動参加の効果因子間の関係（40代）

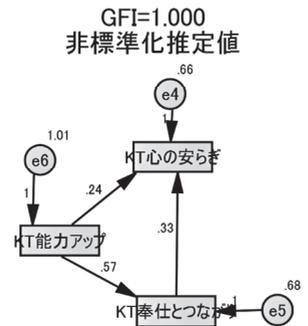


図 3-9 グループ活動参加の効果因子間の関係（50代）

3つの図すべてにおいて、それぞれのパス係数はすべて正であり、パス図の適合性を表すGFIは1.000で基準値0.9を上回った。この3世代のデータのパス図をそれぞれに比較すると、30代は能力アップから奉仕とつながりへのパス係数が高く、逆に奉仕とつながりから心の安らぎへの係数が他の年代と比べると低くなっている。このうち、能力アップから奉仕へのパス係数において、パラメータ間の差に対する検定統計量をみると、30代と40代との間で、-2.527、30代と50代の間で、-2.281と、それぞれに絶対値で1.96を超えており、有意水準0.05で有意といえる。グループ活動参加によって能力アップの効果を実感した場合に、奉仕とつながりの効果の実感に与える影響度が、30代において他の世代よりも有意に高い要因として以下のような点が考えられる。一つは、30代は他の年代と比較して女性の割合が多いためである。前項で確認したように、統計的有意差は確認できなかったが、男性よりも女性のほうが、グループ活動による能力アップの効果実感が奉仕とつながりの効果実感に与える影響度が高い。もう一つは、若い年代は他の年代、上の年代と比較すると、自己の能力アップの効果に対する意識が高いと同時に、新しいグループ活動参加に対する反応度が高く、人とのつながりによって得られる効果に敏感であることが考えられる。そのために、30代回答者のデータにおいては、グループ活動参加による能力アップの効果の実感は、奉仕とつながりの効果の実感に与える正の影響が高いと分析される。

3.7 構造分析による解説と問題点

前節で勤労者のアンケート分析から、グループ活動参加における目的と効果それぞれに3つの因子、計6つの因子を抽出し、それぞれの関係性について分析をおこなった。

まず、目的の3因子と効果の3因子を同じ名前をつけたもの同士でつないだパス図を作成し、モデルの適合度、統計的有意性、パス係数の正負について確認した。モデルの適合度は基準値を上回り、適合性が確認された。パス係数はすべて正であった。これにより、グループ活動参加において抱いた目的は、グループ活動参加によって感じられた同じ効果に正の影響を与えることが分かった。しかし、目的の3因子から、同じ効果の3因子へのパス係数

の統計的有意性において、奉仕とつながり、心の安らぎは統計的に有意であることが確認できたが、能力アップは目的から同じ効果へのパス係数において統計的に有意であることが確認できなかった。

そこで、効果の3因子間の関係性についてパス図を作成して分析した。すると、能力アップの効果因子から、心の安らぎの効果因子に対して、正の影響があることがわかった。さらに、その経路には、直接効果と、能力アップの効果因子から奉仕とつながりの効果因子を経て心と安らぎの効果因子へいたる間接効果の2経路があることがわかった。これらのモデルの適合度、パス係数の統計的有意性についてはすべて基準値を上回り、統計的に有意であることが確認できた。これにより、効果の3因子は互いに影響を与えており、特にグループ活動参加の効果として能力アップを感じた回答者は、それに付随して奉仕とつながりや、心の安らぎといった別のグループ活動参加の効果の実感に正の影響を与えることがわかった。

次にこのパス図を用いて、男女別の性差の有無、年代の差の有無について分析をおこなった。男女差については、女性のほうが能力アップの効果因子が、奉仕とつながりの効果因子へ与える影響が、男性よりも少し高かったが、このパス係数における値の差に統計的有意差は見出せなかった。年代の差については、30代の回答者において、女性の回答者のデータと同じように、能力アップの効果因子が奉仕とつながりの効果因子へ与える影響が、他の40代、50代の回答者よりも高くみられた。このパス係数における値の差について統計的有意性を確認すると、30代と40代、30代と50代、それぞれにおいて統計的有意差が確認できた。このことから、グループ活動参加の効果として能力アップを感じた回答者が、それに付随して奉仕とつながりや、心の安らぎといった別のグループ活動参加の効果の実感に正の影響を与える度合には、年齢によって差があることがわかった。しかし、今回分析したアンケート結果の回答者は、女性の割合が少なく、年齢別のデータの数にも偏りがあったため、より精緻なアンケートの集計、分析が必要であることを補足しておく。

以上から、グループ活動参加において、グループ活動参加の目的と、グループ活動参加によって得られる効果は基本的には一致することがわかった。しかし、グループ活動参加目的に能力アップをあげた回答者は、グループ活動

参加によって能力アップ以外の、奉仕とつながりや、心の安らぎといった新たな、別の効果を実感していることが分かった。人の行為における目的合理性という点のみで考えれば、人は事前に持っていたある目的によって行為がなされ、その行為の効果は事前に持っていた目的の達成度によって測られる。しかし、今回のグループ活動のように、多くの人々と接しながらの活動は、グループ活動参加前に持っていた目的以外にも、新たな、多様な効果を生みだし、人に影響を与えることが分かった。また、今回比較用のパス図は示さなかったが、効果の3因子の関係性において、図3-4から図3-9で作成した、能力アップの効果因子から始まり、直接効果、間接効果の2経路をたどって心の安らぎの効果因子へ向かうパス図のみ、すべての係数が正になるということは大きな発見であった。グループ活動参加前のグループ活動参加の目的が、自分の能力アップという自己利己的なものであっても、グループ活動における他人との関係性によって、奉仕とつながりという新たな効果の発見につながり、それが最終的に心の安らぎという効果につながるのである。これは、人が生きる中でもつ自己利益追求の目的意識が、グループ活動で他人と交流することによって、新たな喜びや新たな幸福感を得られることを意味するものである。

今回のアンケート結果の構造分析によって、われわれはグループ活動参加における目的と効果という2つの視点をもつことで、グループ活動参加によって人がどのような意識変化を起こすのかについて分析をおこなった。しかし、今回のアンケートは、グループ活動に参加した人々に対するアンケートである。グループ活動参加による人々の意識の時系列上の変化について分析するのであれば、グループ活動参加前、およびグループ活動参加後、それぞれの時点で、グループ活動参加の目的や効果についてアンケートをおこなうべきである。この点については今後の課題としたい。また、アンケートの回答者の性別の偏りや、回答数の不足により、AMOSでパス図がうまく分析できないことが度々あった。これも今後の大きな課題である。これから、さらには、どのようなグループ活動が、グループ活動参加者に、より新たな効果を発見させるのか、それによってグループ活動がどのように社会的によい影響を与えるのかといったことについて、より深く分析をおこなう予定である。

3.8 アンケート項目からの構造分析の作成

前項では、因子得点の結果から構造分析を行った。使用したのは因子分析によって得られた目的と効果、それぞれ3つずつ、計6つの因子であった。そこで、本項では、新たに因子分析をおこなって得られた目的と効果の因子を用いて、構造分析をおこなう。

(1) 「奉仕・健康・安らぎ」モデルのシミュレーション

グループ活動において、人の意識構造は入会時と活動時では異なる。しかし今まで見てきたように活動を通して奉仕とつながりや心の安らぎを得ることができる。ここでは心の安らぎは健康につながると仮定して、「奉仕・健康・安らぎ」モデルについて検討する。

人は社会のためになることで満足する（社会満足）、他人のためになることで満足する（人為満足）、一緒に活動していることで安心（安心感）、心身共に健康である（心身健康）という要素を元に検討していく。

人は「社会のためになることをしたい」気持ちで参加し、次に「心身共に健康でありたい」を目的とする。「社会のため」の活動の結果「人のためになった」効果が分かった。一緒に活動することで「安心感」を得ることもできた。また「社会のため」の活動を意識することで、同時に「安心感」を強く持ちたいと思う。「安心感」が増せば「心身の健康」への期待が増してくる。

これらに関して因果関係を見てみると、「社会のため」「人のため」は対称的に因果関係が見られ、「人のため」「安心感」では、効果の面では因果関係が47%と大きな値で認められた。「安心感」では「他人との関係」が重要であることが示された。「社会のため」の活動は「心身の健康」にも良い影響（27%）がある。「他人のための」の効果は、目的の「他人のために」に30%でフィードバックされる。「安心感」と「心身の健康」の関係はやや複雑であるが、35%の因果関係が求まった。目的の「安心感」は効果の「人のため」へ19%で因果関係があり、「心身の健康」とは誤差変数が28%で相関関係が示された。さらに効果面で「心身の健康」で「安心感」へ18%の因果関係が示された。目的の「人のため」と効果の「安心感」のそれぞれの誤差変数間で-13%の相関が見られた。効果の「安心感」に全てが集結したモデルとなった。また目

的「人のため満足」も終結点となっている。これらを図に示したものが図3-10である。

GFI、AGFIともに基準値の0.9を上回っており、モデルの適合性が確認された。図3-10は左側が目的因子、右側が効果因子である。因子間のパス係数は目的「心身健康」から効果「安心感」への係数が小さいながら-0.1で負であるのを除けば、他はすべて正の係数となっている。目的因子側では、目的因子間の関係性をみると、最終的に目的「心身健康」に影響が与えられるのに対し、効果因子側は最終的に効果「安心感」に影響が与えられることがわかる。つまり、グループ活動参加に対して抱く目的の優先順位や関係性と、グループ活動参加によって感じられる効果の優先順位や関係性が異なってい

奉仕健康シミュレーション
GFI=.987
AGFI=.958
標準化推定値

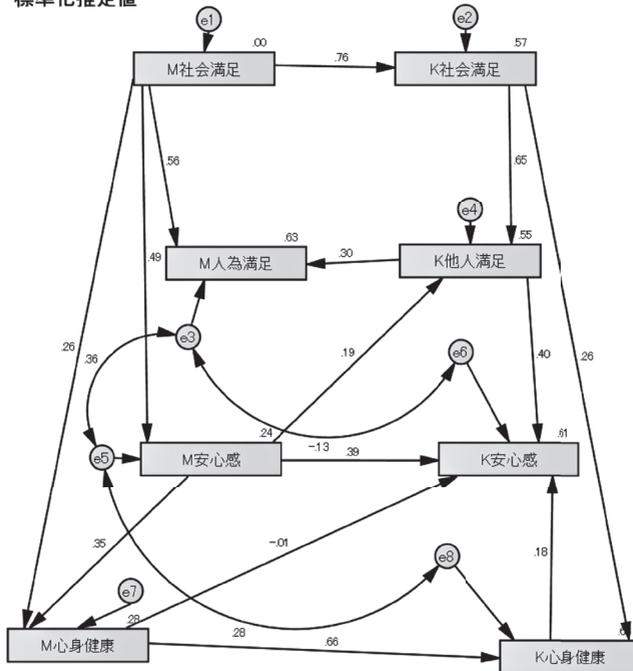


図3-10 奉仕・健康・安らぎモデルの構造モデル

る。前項において述べたように、グループ活動参加の目的と効果は決して一貫した同一のものではなく、グループ活動参加によって新たな効果を実感することがわかる。

(2) 「趣味・付き合い・楽しい期待と効果」モデルのシミュレーション

14項目の期待項目のうち似ている項目をはずして8項目でパス図を作成する。はじめはグループ活動に参加し、同じ趣味の人が見つかり、楽しい時間を過ごすことができた。一緒に何かしたらという思いから、共同作業の目的が実施され、成果を得た。共同作業が実施され楽しかった効果から、楽しむ目的をさらに強めるようフィードバックが行われた。同じ趣味の人が見つかり、一緒に作業して楽しかったので、この人との付き合いが始まった。さらに付き合いを広めるようフィードバックさせた。楽しかった思い出の効果から、もっと協同作業を進めたらという目的になった。同じ趣味の人をもっと広げれば楽しみが増すのでは、また同じ趣味の人を増やせば、付き合いも深められるかもしれない。付き合いを広め深めた結果はさらなる共同作業ができ、盛り上がった。共同作業を増やそうという試みから付き合いをもっと深めよう、また楽しかった思い出効果から付き合いが大変深まった。付き合いも協同作業も楽しさを増やすものだ。同じ趣味の人とうまくいけば付き合いを広げられる。その結果のモデルが図3-11である。

GFI、AGFIともに基準値の0.9を上回っており、モデルの適合性が確認された。図3-10と同様に、図3-11も左側が目的因子、右側が効果因子である。因子間のパス係数は効果「同(じ)趣味人」から目的「付き合い」への係数が-0.25で負であるのを除けば、他はすべて正の係数となっている。前項までは目的因子側から効果因子への向きの矢印、因果関係を想定してパス図が作られ、ほぼすべてのパス係数において正であった。しかし、今回は効果「楽しい」から目的「楽しい時」へ、また効果「付き合い」から目的「付き合い」と目的「協同作業」へと、効果因子側から目的因子側への矢印が引かれ、それぞれにパス係数は正になっている。今までの考察では、グループ活動参加に対して、グループ活動参加前に何らかのグループ活動参加の目的をもち、そのグループ活動参加の目的に対して、グループ活動参加によって得られる

趣味・付き合い・楽しい
 GFI=.985
 AGFI=.956
 標準化推定値

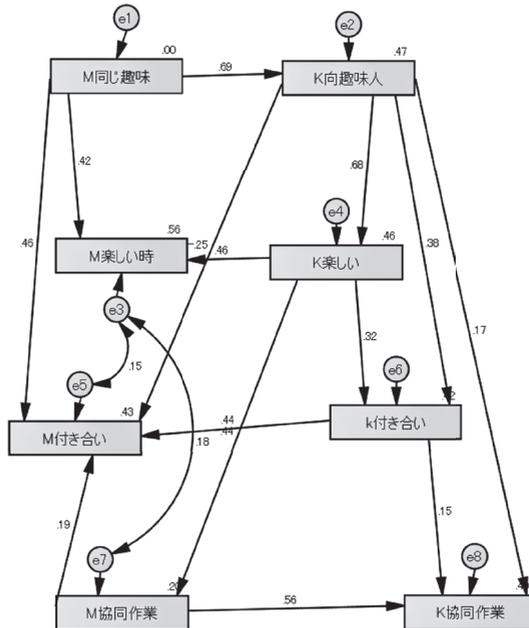


図3-11 趣味・付き合い・楽しい 期待（活動）効果モデル

効果の関係性をみてきた。目的が効果に影響を与えるという因果関係である。それに対して、図3-11では、グループ活動参加によって感じられた効果によって、新たなグループ活動参加の目的が生まれるという今までとは逆の因果関係になっている。前項で、グループ活動参加によって、グループ活動参加前に持っていた目的とは違う、新たな効果の実感について言及したが、さらに、グループ活動参加によって得られた効果が新たな目的を生み出していることがわかる。

(3) 「能力・知識・将来仕事」モデルのシミュレーション

因子負荷が一番大きかった「能力向上」因子から始め、目標から効果へ向

かう因果関係を示していった。目標達成の結果から目標期待のフィードバックが行われ、次の目標への期待が促される。能力向上のための新知識獲得を期待する働きが有り、新知識獲得への因果関係が生じた。目的達成効果は将来方向の目的期待に因果関係を結びつけることができた。目的質問の能力向上と目標達成の誤差変数間で相関関係が結ばれ、目的と効果の対称的な関係が完成された。能力向上の成果から新しい仕事もみつき、将来方向も定まった。新知識の目的にはさらに能力向上因子と相関関係を持つ。新知識そのもの以外すべての項目と因果関係を結ぶと、新しい仕事・将来方向へ向かう因果関係だけで、ここにすべてが集約される。

以上から能力向上因子は、目標達成を目指して、能力向上につとめ、将来方向を安定するためにも、新しい知識を求め、能力のさらなく向上を目指している。

GFI、AGFIともに基準値の0.9を上回っており、モデルの適合性が確認された。これまでと同様に、図3-12も左側が目的因子、右側が効果因子である。因子間のパス係数はすべて正の係数となっている。前項において、効果因子側から目的因子への向きの矢印、因果関係を想定してパス図が作られ、ほぼすべてのパス係数において正であった。これによって、グループ活動参加の

表3-10 8因子間のパス係数の統計的有意性

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
K能力向上	<--- K新能力	0.79	0.03	23.2	***
K新知識	<--- K新目標	0.59	0.04	14.49	***
M目標	<--- K新目標	0.5	0.06	8.12	***
M目標	<--- K新能力	0.33	0.06	5.2	***
K目標達成	<--- K新目標	0.46	0.04	10.38	***
K目標達成	<--- K能力向上	0.1	0.05	2.06	0.04
K目標達成	<--- K新能力	0.24	0.05	4.47	***
M知識	<--- K新知識	0.49	0.06	8.1	***
M知識	<--- K新目標	0.32	0.06	5.46	***
K目標達成	<--- M目標	0.13	0.04	3.62	***
M将来方向	<--- K目標達成	0.58	0.06	9.1	***
M将来方向	<--- M知識	0.17	0.06	2.92	0
K新仕事	<--- M将来方向	0.45	0.04	10.59	***
K新仕事	<--- K新目標	0.48	0.05	10.45	***
Mj能力	<--- K新目標	0.26	0.06	4.26	***
Mj能力	<--- K新能力	0.47	0.07	7.25	***

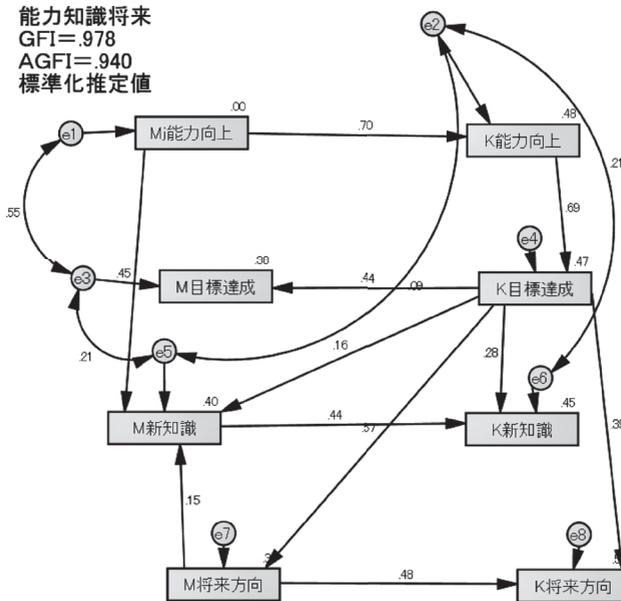


図3-12 能力・知識・将来方向のシミュレーション

目的を前提に、目的が効果に影響を与えるだけでなく、グループ活動参加によって得られた効果が、新たな、別の目的の獲得に正の影響を与えることがわかった。図3-12では、「能力向上」の目的が「能力向上」の効果に正の影響を与えた後に、「目標達成」という新たな効果因子に正の影響を与えた後、さらに「目標達成」「新知識」「将来方向」という3つの新たな目的因子に正の影響を与え、またそのうち「新知識」「将来方向」という2つの目的因子は同じ名前のそれぞれの効果に正の影響を与えている。つまり、グループ活動参加におけるグループ活動参加の目的は、目的とは異なる新たな効果を生み、その新たな効果はまた新たな目的を自覚させ、さらに新たな目的が効果を生むというサイクルを生み出していることが分かる。

3.9 モデルについての考察

使用したデータはこの調査を行ったある時点での値しかもっていないし、

時間的推移に沿ったデータとしても取られていない。一方シミュレーションでは時間経過に従って変わる状態を仮定しており、その観測時点でのデータと対比すべきであるがそれは行えていない。あるデータは最終時点(回答時)の値で、厳密に言えば別なものと考えられる。

今回のアンケートデータの回答はいくつかの項目に対して目標を定め、行動を起こし、その結果得られた効果を測定したものである。

全ての項目が少しずつ変化し、じわじわと最終結果になったのかも不明である。また1つずつシミュレーションしていくことは大変な作業であるが、完成することができた。今回のシミュレーションの実験をして得られた構造方程式の解である係数を見ると、じわじわと変化していくものでなく、個別項目では、その条件下で完成したものと等しい。ただし他の項目を経由して影響する間接効果が生ずる場合はその値だけ修正され、全体効果は一定であることが分かった。

3.10 考察

勤労者のアンケートデータ分析結果について述べてきた。グループの中で人々は何を感じ、どのような影響をお互いに与えているのか。先行研究の多くは、既存の集団・グループを前提にし、その構成員にアンケートを行ない、ある一時点において構成員が何を感じたかを確認するアンケート結果を分析してきた(西村、金、2010など)。しかし、人があるグループに入る要因や目的は多様であり、さらにグループ参加後に感じる効果もグループ参加前に持っていた目的とは異なる可能性もある。グループ参加前、グループ参加後で人々の目的意識とグループ参加によって感じられる効果にはどのような関係性、あるいはどのような変化があるのか。この分析のために、われわれは、グループ活動を経験した人々へのアンケート調査に対して、グループ活動参加の目的と効果とに抽出された因子を分けて分析をおこなった。

3.6節では、グループ活動参加の目的と効果について、それぞれに3因子、計6因子を抽出して、われわれが同じ名前をつけた目的因子と効果因子とを結び、その関係性を分析した。すると、グループ活動参加における目的と効果は一致しており、グループ活動に対して何らかの目的をもつ人々は、グルー

ブ活動参加によってその目的と同じ効果を得ることがわかった。グループ活動参加による同じ目的から効果への正の因果関係が認められた。しかし、われわれが能力アップと名づけた目的因子から同じ名前の効果因子へのパス係数だけは統計的に有意でなかった。そこで3つの効果因子間の関係性をさらに分析した。すると能力アップの効果因子から心の安らぎの効果因子への正の影響があることがわかった。そこには、直接効果と、奉仕とつながりの効果因子を経る間接効果の2つの経路が確認された。この結果によって、グループ活動参加に対して持っていた目的は、グループ活動参加後もそのまま一貫して持ち続けて効果として感じるのでは無く、グループ活動参加によって感じられた効果は、新たな別の効果の実感を導くことがわかった。特に、自分の能力アップという自己利益に基づく効果は、それだけの効果にとどまらず、グループ活動によって他人と交流することにより奉仕とつながりや心の安らぎといった新たな効果を生み出すことがわかった。このようなグループ活動参加によって得られる活動効果の波及効果に、男女、年代別の差があるのかをさらに分析した。すると今回のアンケート結果からは、女性は男性よりもグループ活動参加による能力アップの効果の実感が、新たな、奉仕とつながりの効果の実感に結びつくことが強いことがわかったが、残念ながら統計的有意差は確認できなかった。年代別で比較を行なうと、30代は、同様に、グループ活動参加による能力アップの効果の実感が奉仕とつながりの効果の実感に、他の年代よりもつよく結びつくことが分かった。30代と40代、30代と50代を比較すると、それぞれに統計的有意差が確認された。30代の回答者に女性の割合が高いことや、30代のほうが40代や50代よりもグループ活動での他人との交流によって得られる効果が高いといった仮説が考えられる。

3.8節からは新たな因子の抽出によって、さらにグループ活動参加による目的と効果の関係性について分析をおこなった。すると、単に1つの目的をもってグループ活動に参加し、その目的に沿った効果を得るという単純な流れではなく、グループ活動参加の目的においても、目的因子間で因果関係があり、グループ活動参加においてある目的は別の目的の所持に影響し、また複数の目的を持ちうるということがわかった。また、目的因子と効果因子間の関係性において、新たにパス図を作成して分析すると、グループ活動参加の目的は、グ

ループ活動参加によって、当初の目的とは異なった新しい効果の実感につながり、さらにその新しい効果の実感が、さらに別の新しい目的の所持へとつながり、新しい目的はまた効果を生み出すという目的→効果→目的→効果というサイクルが確認できた。

人間の行為の目的合理性を考えれば、人はある目的をもって行為を選択し、その行為の結果を一貫して保持した目的の達成度によって評価し、効果とする。しかし、本稿が明らかにしたように、グループ活動参加という行為によって、参加者の考え方、感じ方はグループ活動から何らかの影響を受けて変化し、また、参加者のグループ活動参加によってグループ自体も変化する。これによって、行為選択前の目的は、行為の実行後に変化したり、新たな目的が見出され、新たな目的の達成度によって、行為自体の評価も変化し、新たな効果が実感される。特に、自分の能力アップという自己利益に基づくグループ活動参加の目的は、グループ活動参加によって、自分の能力アップだけの効果への期待にとどまらず、他人への奉仕とつながりや心の安らぎといった新たな、社会的な効果を生み出すことがわかった。

しかし、グループ活動参加経験がある人々を対象にアンケート調査を行なったため、グループ活動参加前後でどのような目的、効果の変化があるかはわからなかった。今後の課題として、アンケートの質問項目や、アンケート対象について、またグループ活動参加のどの時点にいる人々にどのようにアンケートをとるべきか、より検討が必要である。グループ活動参加によって、社会的によい効果を生み出す参加者の特性、グループの特性について、より深い考察がさらに必要である。

4. 勤労者のアンケート分析 2

第3章において、主に勤労者のグループ活動に特性に関する実証研究のうち、グループ活動の期待とその効果についての分析を行った。本稿ではグループ活動が職場での働き方にどのような関係を及ぼすかを明らかにするために、新たにアンケートを設計して分析した。そのなかで、アンケートの内容と分析結果の一部について報告する。次の第4部において、このアンケートを利用して共分散構造分析を行う。

4.1 調査概要

4.1.1 アンケート対象

本調査は、個人が趣味や能力向上のために行うグループ活動が個人の職場での働き方に影響を及ぼすかについての調査である。アンケートはNTTコムオンライン・マーケティング・ソリューション株式会社に依頼して、2017年3月にオンラインで回答を得た。回答していただいた方は以下の条件に合致する方である。

回答者は「1年以上にわたって」「年に2回以上」のグループ活動を行っている勤労者であり、継続して5年以上、企業組織で働いており、年齢は25才～64才までである。

回答者の内訳は全員で381名、男性は314名で割合は82%と女性は67名で割合は18%である。分析対象としての年代は25才～34才、35才～44才、45才～54才、55才～64才に分類した（表4-1）。

表4-1 回答者性別年齢別集計

年齢	男性		女性		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
25-34才	49	16	35	52	84	22
35-44才	80	25	16	24	96	25
45-54才	110	35	11	16	121	32
55-64才	75	24	5	7	80	21
合計	314	0.82	67	0.18	381	

4.1.2 活動するグループについて

個人が所属するグループ活動としては以下の4種類を選択した。

- ・ 組織での自己啓発・キャリア形成を目的として知識やスキルを得るグループ
- ・ 個人的に趣味や教養を身につけることを目的としたグループ
- ・ 個人の健康な身体と健全なる精神の育成を目的としたグループ
- ・ 社会に貢献するために社会的責任を果たすことを目的としたグループ

回答はグループ活動の特徴が分かるように活動の内容レベルを5件法（(1) 全く当てはまらない、(2) 殆ど当てはまらない、(3) どちらとも言えない、(4)

まあ当てはまる、(5) 良く当てはまる) で回答してもらった。5 件法にした理由は 1 つのグループでも複数の目的を持つ場合があるからである。

グループ活動についての回答のうち、4 または 5 (まあ、よく当てはまる) と回答した数を集計してグループ活動所属の割合を求めたものが、図 4-1 である。

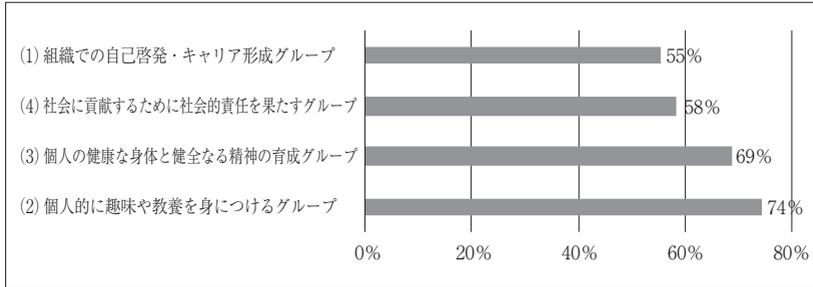


図 4-1 グループ活動所属の種類の割合

全体で見ると、最も多いのは個人的な趣味や教養であり、第 2 位が健康な身体、第 3 位が社会貢献となり、少しの差で第 4 位の組織での自己啓発となった。

男女別に割合を集計したものが図 4-2 である。但し、集計法は図 4-1 と同様である。

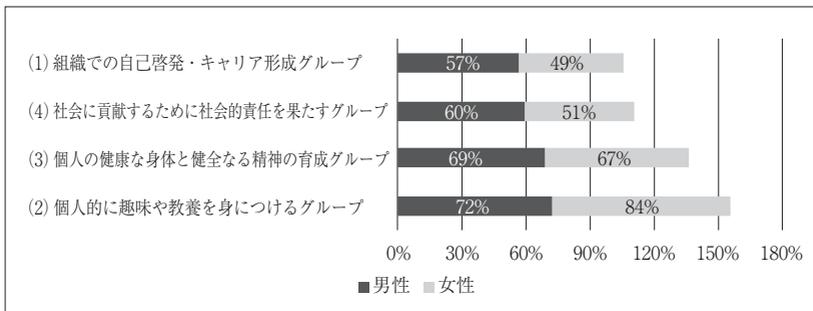


図 4-2 男女別グループ活動への参加

男性の7割以上、女性の8割以上が個人的な趣味や教養を身につけるグループにかかわる活動を行っていることがわかる。

これらグループ活動の選択について男女差があるかを調べるために、Wilcoxonの順位和検定を行った。その結果は表4-2に示すとおりであり、男女差があったのは、(2)の個人的に趣味や教養をつけるグループであり、女性が高い値を示した。

表4-2 グループ活動の男女差

n=381 男女別順位検定結果		Z	漸近有意確率(両側)
1-1-1	組織での自己啓発・キャリア形成グループ	-1.365	.172
1-1-2	個人的に趣味や教養を身につけるグループ	-2.684	.007
1-1-3	個人の健康な身体と健全なる精神の育成グループ	-.313	.755
1-1-4	社会に貢献するために社会的責任を果たすグループ	-1.570	.116

4.1.3 グループ活動と職場組織での働き方について

今回のアンケート調査はグループ活動と職場組織での働き方にどのような関係があるかを調べるためのものであり、表4-3のように大きく5つの項目について調査した。

表4-3 質問の大項目と質問数

問番号	大項目	質問数
問7	(1)グループ活動の入会前の目的	9
問8	(2)グループ活動の実施とその効果(回答者の変化)	13
問9	(3)グループ活動の実施とその効果(グループ活動の変化)	10
問10	(4)職場での回答者の働き方について	7
問11	(5)職場での回答者の満足度	9

それらの回答も5件法((1)全く当てはまらない、(2)殆ど当てはまらない、(3)どちらとも言えない、(4)まあ当てはまる、(5)良く当てはまる)を利用した。

4.2. グループ活動前の期待と活動実施の効果について

4.2.1 全体傾向

個人がグループ活動を行うことは、活動によってなんらかの効果を得るためである。第3章で報告したアンケート分析によると、グループ活動への期待因子は、30代が仕事、40代は趣味と仕事、50代は趣味という傾向が見られた。

ここでは新しいアンケート結果を用いて、問7のグループ活動前の期待と問8の活動実施後の効果に対応する項目について分析を行った。まず、問7と問8の対応する質問項目について、全員の381名の記述統計量と正規性の検定を行ったものを表4-4に示す。

表4-4 期待と効果の記述統計量

質問項目	期待(問7)				効果(問8)			
	記述統計量 (n=381)		Kolmogorov-Smirnov の正規性の 検定(探索的)		記述統計量 (n=381)		Kolmogorov-Smirnov の正規性の 検定(探索的)	
	平均値	標準偏差	統計量	有意確率	平均値	標準偏差	統計量	有意確率
(1)知識やスキルを向上	3.28	1.20	.225	.000	3.38	1.04	.253	.000
(2)心の安らぎや充足感を得る	3.30	1.03	.220	.000	3.45	0.97	.243	.000
(3)他人とのつながりを感じる	3.51	1.01	.266	.000	3.70	0.89	.283	.000
(4)他人への奉仕や手助けをしたい	2.91	1.24	.183	.000	3.14	1.09	.214	.000
(5)達成すべき明確な目標をもつ	3.10	1.14	.214	.000	3.18	1.01	.232	.000
(6)人間的に成長したい	3.23	1.09	.211	.000	3.38	0.95	.219	.000
(7)自主性・主体性を養いたい	3.10	1.09	.220	.000	3.30	1.00	.208	.000
(8)信頼できる友人を作りたい	3.32	1.08	.215	.000	3.48	0.93	.232	.000

正規性の検定を行ったところ、各項目とも正規性が仮定できなかったため、グループ活動のこれらを期待と効果について Wilcoxon の符号付き順位検定により、男女別、年代別、グループ活動別に分析した(表4-5)。

表4-5 期待と効果に対するWilcoxonの符号付き順位検定

期待と効果の問題番号		上段：Z 下段：漸近有意確率（両側）							
		8-1:7-1	8-2:7-2	8-3:7-3	8-4:7-5	8-6:7-6	8-7:7-7	8-8:7-8	8-10:7-9
	上段：種類	自分のスキルや知識が向上	心の安らぎや充足感	他人とのつながりを感じる	他人への奉仕や手助け	達成すべき目標とは異なる目標が見つかる	人間的に成長した	自主性・主体性を持って活動	信頼できる友人を作る
	下段：人数								
全体	全体	-2.586 ^b	-3.899 ^b	-4.106 ^b	-5.058 ^b	-.831 ^b	-3.238 ^b	-4.194 ^b	-3.593 ^b
	381	.010	.000	.000	.000	.406	.001	.000	.000
男女別	男性	-2.775 ^b	-3.770 ^b	-3.223 ^b	-4.136 ^b	-.481 ^b	-2.166 ^b	-3.705 ^b	-3.207 ^b
	314	.006	.000	.001	.000	.630	.030	.000	.001
年代別	25才～34才	-1.050 ^d	-2.223 ^b	-2.653 ^b	-2.027 ^a	-1.324 ^a	-2.296 ^b	-2.224 ^b	-1.597 ^b
	84	.294	.026	.008	.043	.185	.022	.026	.110
グループ	35才～44才	-.864 ^d	-1.036 ^b	-1.013 ^b	-2.187 ^a	-.390 ^a	-1.255 ^b	-1.779 ^b	-.380 ^d
	96	.388	.300	.311	.029	.697	.209	.075	.704
グループ	45才～54才	-1.623 ^b	-2.917 ^b	-3.594 ^b	-3.444 ^b	-1.439 ^b	-2.190 ^b	-2.971 ^b	-3.414 ^b
	121	.105	.004	.000	.001	.150	.029	.003	.001
グループ	55才～64才	-1.660 ^d	-1.566 ^b	-.710 ^b	-2.255 ^b	-.860 ^b	-.594 ^b	-1.252 ^b	-1.316 ^b
	80	.097	.117	.478	.024	.390	.552	.211	.188
グループ	組織での自己啓発・キャリア形成 >=4	-1.923 ^b	-3.182 ^c	-1.765 ^c	-1.349 ^a	-1.200 ^a	-.233 ^c	-.612 ^c	-.248 ^b
	133	.055	.001	.078	.177	.230	.816	.540	.804
グループ	個人的に趣味や教養を身につけること >= 4	-1.082 ^d	-1.289 ^b	-3.509 ^b	-4.881 ^b	-.955 ^b	-2.340 ^b	-3.458 ^b	-1.814 ^b
	211	.279	.197	.000	.000	.340	.019	.001	.070
グループ	個人の健康な身体と健全なる精神の育成 >=4	-2.424 ^a	-1.337 ^b	-1.733 ^b	-2.740 ^a	-.680 ^a	-2.659 ^b	-4.065 ^b	-1.349 ^b
	157	.015	.181	.083	.006	.496	.008	.000	.177
グループ	社会に貢献するために社会的責任を果たす >= 4	-2.142 ^d	-2.708 ^b	-1.810 ^b	-.359 ^d	-.492 ^d	-.700 ^d	-1.417 ^d	-1.924 ^d
	131	.032	.007	.070	.719	.623	.484	.156	.054

b. 負の順位に基づく

c. 正の順位に基づく

これらの分析結果について述べていく。調査項目の中の「(5) 達成すべき目標とは異なる目標が見つかる」については、男女別、年代別、グループ活動種類別の全てで有意な差は無かった。

その他の項目について、全8項目のうちの残り7項目についてグループ活動時に期待していたことに対して効果があったかについて個々に見ていく。

4.2.2 男女別分析

男性は7質問項目全てについて期待に対する効果があったのに対して、女性は「(1) スキルや知識を向上」「(2) 心の安らぎや充足感を得る」「(3) 信頼できる友人を作りたい」については効果が無いという結果であった。グループ活動の内容において、男女差のあった(2)の趣味や教養を身につけるグループ活動が7割を超えたことと関係があると考えられる。これについては、グループ別の分析のところで分析を行う。

4.2.3 年代別分析

年代別では、4つの年代分類のすべてで「(1) スキルや知識の向上」には目的に対して有意な差があるほど、効果は見られなかった。

35才～44才と55才～64才の2つの年代は、「(4) 他人への奉仕や手助け」についてのみ、期待と効果に対して有意な効果がみられた。それ以外の項目については、効果の項目には、効果はあったが、差がある程には効果が無かったと言うことである。

25才～34才と、45才～55才については似たような項目で差が有り、「(1) 知識やスキルを向上」の項目だけ有意な差が無かった。しかし、その他の「(2) 心の安らぎや充実感」「(3) 他人とのつながり」「(4) 他人への奉仕や手助け」「(6) 人間的に成長」「(7) 自主性を持てる」の5項目に有意に差があった。25才～34才は入社して15年程度までの社員であり、若手社員や中堅社員と呼ばれる。これらの社員にとって会社組織以外のグループ活動が多く多くの点で様々な効果を果たしていることが分かる。45才～55才も同じ傾向があり、中間管理職としての仕事上の問題点解決の一助となっている可能性がある。

逆に35才～44才と55才～64才までの勤労者にとっては「(4) 他人への奉仕や手助け」についてのみ有意な差があり、他の項目については効果が無いことが分かった。この世代では、グループ活動はそう熱心で無いために効果を感じれなかったのでは無いかと想像できる。55才～64才は定年後の生活準備期間となり、グループ活動への期待が高まりその効果が薄れたと考えられる。

4.2.4 グループ別分析

活動しているグループ別のうち「自己啓発・キャリア形成」グループは、今までの傾向とは異なっている。それは、今までの順位検定においては全てが負の順位であった。ところがこのグループにおいては、「(1) 知識やスキルを向上」「(5) 達成すべき明確な目標」「(8) 信頼できる友人」の3つは期待より効果が有意な差ではないが、効果があったことを示している。しかし、それ以外の「(2) 心の安らぎと充実感」「(3) 他人とのつながり」「(4) 他人への奉仕や手助け」「(6) 人間的成長」「(7) 自主性を養う」の5つの項目で、期待より効果が大きかった。特に(2)の「心の安らぎや充実感」については、

有意に差がある程度に効果が期待以下であった。もともと自己啓発を目的としたグループであるため、「心の安らぎや充実感」を得られるとは考えられないが有意に期待していたことより、低い評価となった。

「趣味や教養」グループでは、「(3) 他人とのつながり」「(4) 他人とへの奉仕や手助け」「(6) 人間的に成長」「(7) 自主性・主体性を養いたい」の4つの項目に効果的に有意に差があった。趣味や教養のスキルは期待ほどに効果は無かったが、グループ活動によりつながりを含めた人間的な成長へと変化が起こったことを示している。

「健康な身体の育成」グループは「(1) スキルや知識の向上」「(4) 他人への奉仕や手伝い」「(6) 人間的に成長」「(7) 自主性・主体性を持って活動」の4項目に効果的に有意に差があり、個人的な変化に効果感を得ていることが分かる。

「社会的貢献グループ」は、「(1) スキルや知識が向上」と「(2) 心の安らぎや充足感」の2つの項目について有意に差があった。もともと社会貢献を期待した人たちにつながりや手助けなどもともと期待してなかったことと考えられる。「(5) 達成すべき明確な目標」については、有意な差では無いが、期待が効果を上回った。

4.2.5 期待と効果に対する分析

男女別、年代別、グループ別によってその期待と効果について分析してきた。様々なグループ活動になんらかの期待をしてその効果を得ているが、分類により、様々な違いがあることが分かった。今回の場合、「自己啓発・キャリア形成」のグループについて、期待以下の効果であったという項目が多かった。そこで、このグループを選択した回答者の年代別の割合を男女別にグラフ化した(図4-3)。

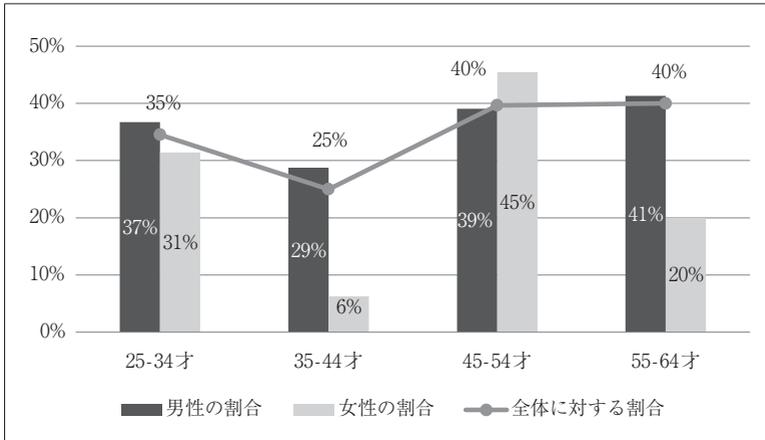


図4-3 自己啓発・キャリア形成グループの年齢構成比

男性女性共に、35才～44才では、自己啓発のためのグループ活動に参加する割合は低く、45才～54才で最も高くなる。一番必要に迫られた時期に活動していることが予想され、その効果に対する期待も大きかったためにマイナスの効果がでたものと考えられる。

4.3 期待・効果・変化・働き方・満足度に関する分析

今回の分析の目的であるグループ活動をする人々がどのような期待を持ってグループ活動を実施し、その変化はどのようなになったか、それらは働き方や働く際の満足度と関係があるかについて分析を行った。男女でグループ活動への期待が異なるため、男女別に分析を行った。

4.3.1 男性についての因子分析

まず、調査項目の問7から問11までの48項目について男性のデータを分析対象として、最尤法による因子分析を行った。固有値の変化（19.54、3.07、2.85、2.25、1.75、1.43、1.18・・・）と因子の解釈性を考慮して、4因子構造を選択した。再度4因子を仮定して、Promax回転によって分析した。最終的な因子パターンと因子間相関を表4-6に示す。なお、回転前の4因子で48項目

表4-6 男性の因子パターンと因子間相関

男性 因子分析		因子				因子名	
		I	II	III	IV		
8-11	効果	活動自体、楽しいものであり、時間が許す限り出席	.928	-.179	.066	-.055	つな がり
8-3	効果	他人とのつながりを感じる	.889	-.201	-.033	.061	
8-2	効果	心の安らぎや充足感を得る	.791	-.235	.163	-.039	
8-10	効果	信頼できる友人を作ることができた	.741	-.089	-.148	-.020	
8-9	効果	協調性が高まった	.716	.054	.118	-.085	
9-8	変化	活発化の理由はグループメンバの互酬性のおかげ	.711	.184	-.106	-.098	
9-2	変化	このグループに「所属している」という意識は高い	.709	.046	-.107	.144	
9-4	変化	グループメンバがスキルや知識を身につけられない場合には積極的に援助する	.667	.168	-.064	.033	
7-3	期待	他人とのつながりを感じる	.667	.000	.116	-.009	
7-2	期待	心の安らぎや充足感を得る	.655	-.214	.126	-.037	
9-1	変化	このグループに「所属している」という意識は高い	.619	.090	-.137	.066	
9-3	変化	グループメンバがスキルや知識を身につけられるように援助する	.616	.264	-.055	-.027	
9-7	変化	活発化の理由はグループメンバの向上心のおかげ	.599	.345	-.099	-.093	
9-6	変化	グループの活動はより活発になっている	.556	.256	-.121	-.029	
9-5	変化	グループ活動が沈滞しているときには、それを活性化する	.532	.298	-.126	.033	
10-2	働き方	組織に困っている人がいて時間的余裕があれば、積極的に支援する	.514	.066	-.127	.242	自己 啓発
7-9	期待	信頼できる友人を作りたい	.505	.128	.226	-.060	
9-9	変化	活発化の理由はグループリーダーの活躍のおかげ	.442	.294	-.110	.058	
7-6	期待	達成すべき明確な目標をもつ	-.100	.872	.007	-.100	
7-8	期待	自主性・主体性を養いたい	-.026	.849	.023	-.088	
8-5	効果	達成すべき明確な目標が実現できつつある	-.084	.827	.032	.034	
8-6	効果	達成すべき目標とは異なる目標が見つかっている	-.025	.781	.088	-.042	
7-7	期待	人間的に成長したい	.075	.762	.014	-.110	
7-5	期待	他人への奉仕や手助けをしたい	-.183	.736	.032	.080	
7-1	期待	知識やスキルを向上	-.074	.720	.056	-.011	
8-1	効果	自分のスキルや知識が向上している	-.020	.716	.005	.024	
8-4	効果	他人への奉仕や手助けができています	-.023	.649	-.005	.116	
8-8	効果	以前と比較して自主性・主体性を持って活動できる	.168	.583	.057	.093	
8-7	効果	人間的に成長したと感じる	.269	.524	.041	.024	
8-13	効果	積極的に責任を担ったり、リーダーシップを取る	.200	.516	-.006	.090	
9-10	変化	活発化の理由は私のがんばりのおかげ	.073	.512	.118	.032	
11-5	満足度	自分の能力以上の仕事を頼まれることはほとんどない	.065	.031	.777	-.042	スト レス
11-3	満足度	急ぎの仕事に追われることはほとんどない	-.024	.090	.747	.079	
11-4	満足度	わき目もふらず、仕事に没頭しなければならないことはほとんどない	.024	.044	.745	.094	
11-6	満足度	やり遂げるのに勉強が必要な仕事を頼まれることはほとんどない	.052	.120	.644	-.030	
11-2	満足度	今の仕事にやりがいを感じている	-.028	-.054	-.011	.960	働 き 甲 斐
11-1	満足度	今の仕事が好き	-.045	-.040	.035	.934	
11-8	満足度	周りの人が自分に期待していると感じる	.023	.080	.058	.614	
11-9	満足度	自分の仕事の目的と目標がはっきりわかっている	.228	.084	.067	.475	
		因子間相関	I	II	III	IV	
		I つながり	—	.711	.271	.554	
		II 自己啓発		—	.300	.521	
		III 働き甲斐			—	.266	
		IV ストレス				—	

の全分散を説明する割合は57.7%であった。

第Ⅰ因子は18項目から構成されており、効果や変化として「つながり」を感じる項目が高い負荷量をしめしており、「つながり」因子と命名した。

第Ⅱ因子は明確な目標や自主性などの期待と効果項目が高い負荷量を示しており、「自己啓発」因子と命名した。

第Ⅲ因子は仕事に対する満足度のうち、ストレスを感じる項目が集まっている。回答そのものはすべてストレスに関するものは「無い」が、ストレスに関する項目であることから「ストレス」因子と名付けた。

第Ⅳ因子は、働いたときの満足度であり、「働き甲斐」因子と名付けた。これら4つの因子は共に正の相関を持っている。

次に下位尺度得点を求めてそれを年代別に図4-4に示した。

55才～64才までの勤労者は全体として因子得点が高い傾向があり、最も高かったのが働き甲斐であった。全体としても働き甲斐、つながり、自己啓発、ストレスの順に大きいが、45才～54才の勤労者はつながりが最も高かったが他の年代と異なるものであった。

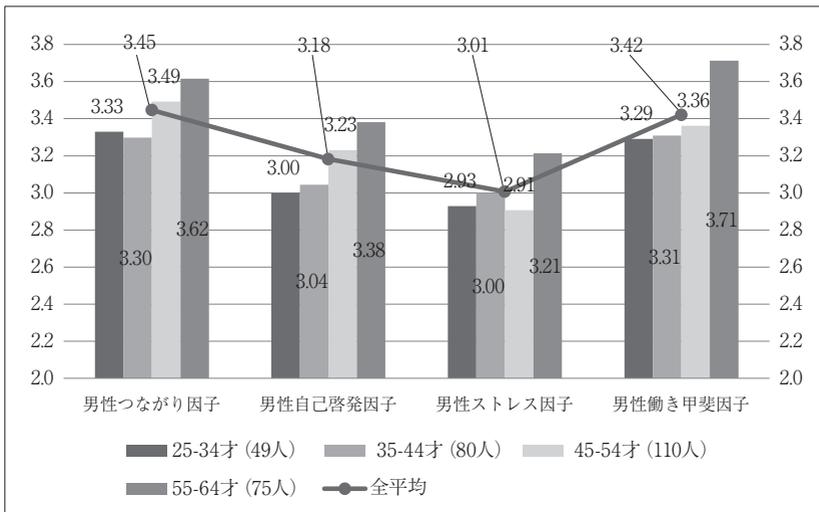


図4-4 男性の年代別因子得点

4.3.2 女性についての因子分析

4.3.1と同様に女性についても因子分析を行った結果を表4-7に示す。48項目について女性のデータを分析対象として、最尤法による因子分析を行った。固有値の変化（17.90、3.88、3.60、2.83、2.00、1.73、1.56・・・）と因子の解釈性を考慮して、4因子構造を選択した。再度4因子を仮定して、Promax回転

表4-7 女性の因子分析結果

女性 因子分析		因子				因子名	
		I	II	III	IV		
9-7	変化	活発化の理由はグループメンバの向上心のおかげ	.882	-.021	.114	-.078	つながり
8-2	効果	心の安らぎや充足感を得る	.816	-.201	-.003	.071	
9-8	変化	活発化の理由はグループメンバの互酬性のおかげ	.786	.068	.040	-.003	
8-3	効果	他人とのつながりを感じる	.728	-.031	-.010	-.066	
9-6	変化	グループの活動はより活発になっている	.716	.045	.068	.153	
7-2	期待	心の安らぎや充足感を得る	.697	-.132	.055	-.020	
9-9	変化	活発化の理由はグループリーダーの活躍のおかげ	.694	.123	-.007	-.066	
8-11	効果	活動自体、楽しいものであり、時間が許す限り出席	.675	.089	-.093	.222	
8-9	効果	協調性が高まった	.642	.197	-.038	.017	
7-3	期待	他人とのつながりを感じる	.505	.177	.028	.030	
9-1	変化	このグループに「所属している」という意識は高い	.440	.055	.146	.061	自己啓発
7-8	期待	自主性・主体性を養いたい	-.092	.957	.012	.064	
7-9	期待	信頼できる友人を作りたい	.058	.802	-.152	.060	
8-13	効果	積極的に責任を担ったり、リーダーシップを取る	-.086	.779	.122	.002	
7-7	期待	人間的に成長したい	-.010	.736	.164	-.010	
8-4	効果	他人への奉仕や手助けができています	-.233	.689	.280	.107	
9-10	変化	活発化の理由は私のがんばりのおかげ	.202	.667	-.149	-.198	
8-6	効果	達成すべき目標とは異なる目標が見つかっている	.320	.611	-.199	-.031	
8-12	効果	活動日以外にも、活動のための準備や練習を行う	.298	.501	-.242	.072	
10-3	働き方	組織の中で自分自身が置かれている役割や要件を誠実に果たす	.021	-.134	.849	.158	
10-2	働き方	組織に困っている人がいて時間的余裕があれば、積極的に支援する	-.067	.007	.801	.103	
11-9	満足度	自分の仕事の目的と目標がはっきりわかっている	-.039	-.043	.693	.057	
11-2	満足度	今の仕事にやりがいを感じている	.059	-.133	.635	-.146	
10-7	働き方	同僚や部下に対して丁寧に受け答えをする	.234	.098	.580	.042	
10-6	働き方	同僚や上司にささいなことで不平不満を言わない	-.114	.259	.504	-.014	
10-1	働き方	組織のために積極的に提案、同僚の避ける仕事を進んで行う	.057	.273	.449	-.217	
11-1	満足度	今の仕事が好き	.258	-.148	.427	-.024	
9-2	変化	このグループ活性化のために一肌ぬぐ	.291	.242	.416	.021	
11-8	満足度	周りの人が自分に期待していると感じる	.210	.186	.396	-.321	
11-3	満足度	急ぎの仕事に追われることはほとんどない	-.147	.231	.126	.825	ストレス
11-4	満足度	わき目もふらず、仕事に没頭しなければならないことはほとんどない	-.002	.075	-.035	.823	
11-5	満足度	自分の能力以上の仕事を頼まれることはほとんどない	.092	-.129	.010	.794	
11-6	満足度	やり遂げるのに勉強が必要な仕事を頼まれることはほとんどない	.153	.071	-.273	.545	
11-7	満足度	二人の人から相反する仕事の要求を受けることはほとんどない	.157	-.177	.251	.525	
		因子間相関	I	II	III	IV	
		I つながり	—	.625	.512	.054	
		II 自己啓発		—	.492	.083	
		III 働き甲斐			—	-.122	
		IV ストレス				—	

によって分析した。最終的な因子パターンと因子間相関を表4-6に示す。尚回転前の4因子で48項目の全分散を説明する割合は58.78%であった。

第Ⅰ因子は11項目から構成されており、効果や変化として心の安らぎや他人とのつながりを感じる項目が高い負荷量を示しており、「つながり」因子と命名した。

第Ⅱ因子は自主性を養うことや積極的に責任を担うなどの期待と効果項目が高い負荷量を示しており、「自己啓発」因子と命名した。

第Ⅲ因子は仕事の目的や目標がはっきりしていることなど、働き方と満足度に関するものがあり、「働き甲斐」因子と名付けた。

第Ⅳ因子は、男性と同様に働き方に対する考え方であり、ストレスを感じる項目が集まっており、「ストレス」因子と名付けた。

これら4つの因子は男性と同じ名前の因子であるが、内容は表4-6に示したように、男性の項目名や項目数と異なる。

これら4つの因子間に1つだけ、負の相関がある。それは、働き甲斐因子とストレス因子である。男性の場合は正の相関があったが、女性とは内容が異なるためと考えられる。内容的には仕事上でのストレスは感じないで満足

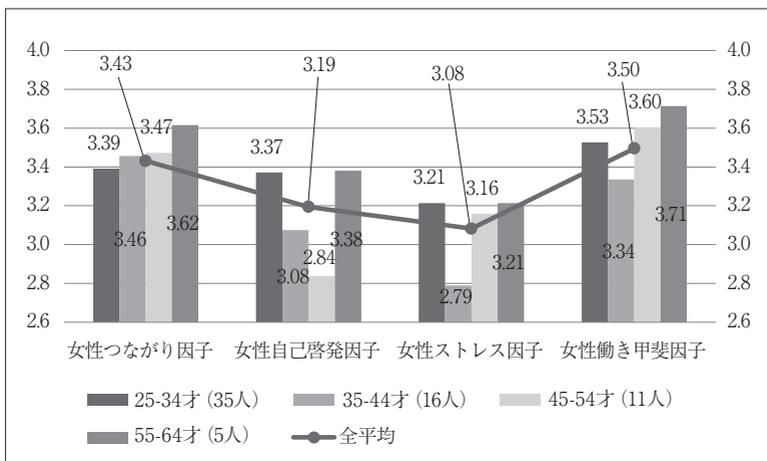


図4-5 女性の因子得点分布（年代別）

ある仕事環境ではあるが、それらは、満足度とは関係ない。また、ストレス因子は他のつながり因子や自己啓発因子とも相関を持たなく、上記と同様に仕事上のストレス因子はつながりや自己啓発とは関係ない。

次に下位尺度得点を求めてそれを年代別に図4-5に示した。

女性も男性と同様にストレスが一番低く、次が自己啓発、つながりとなり、働き甲斐が最も高い。しかし、それらは、年代毎に異なり、25才～34才と55才～64才は全体傾向と同じであるが、35才～44才はつながりが高く、45才～54才は自己啓発が最も低い。

4.4 データ分析から見たグループ活動の期待効果とその働き方

3章で述べたような結果が4章でも得ることができた。今回は職場での働き方や満足度を入れたため、それとの関係も明らかにすることができた。特に男性と女性、年代別において、職場での働き方や満足度についても異なることが明らかになった。このデータを用いて第4部で、総合構造分析を行う。

(注1) リア充とは

リア充とはリアルの生活が充実することであり、ネットの世界が充実する人のことをネット充と呼ぶ。

(注2) 他人への信頼について

「平成14年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」の報告書のアンケート項目に記述されている。

https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report_h14_sc_ref2.pdf

他人への信頼については次の2つの質問の種類を用意している。

1. 他人へ信頼について

1-(1) あなたは、一般的に人は信頼できると思いますか。それとも信頼出来ないと思いますか。あなたの考え方に近いと思うレベルの数値を1つ選び、その数字に○印をつけてください。

1-(2) それでは、「旅先」や「見知らぬ土地」で出会う人に対してはいかがでしょうか？

前者を「パーソナルな信頼関係」後者を「一般的な信頼関係」として利用している。

このアンケートの結果では、一般的な人への信頼について、「ほとんどの人は信頼できる」と回答した割合は24.8%（Webでは32.4%）であった。

社会的信頼を「一般的な信頼（一般的な人への信頼、見知らぬ土地での人への信頼）」と「相互信頼・相互扶助」として近所・親戚・友人知人・職場の信頼としている。

(注3) Social Capital：人間関係資本

ロバート・パットナム、河田潤一訳（2001）による『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』の定義は「ソーシャル・キャピタルとは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会的仕組みの特徴」。

(注4) IBM SPSS AMOS

IBM社の販売している統計パッケージSPSSの共分散構造分析（構造方程式モデル）ソフトウェアであり、ver23。

参考文献

情報通信白書（2015）平成27年版情報通信白書、SNSの利用率

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html>（2018/1/20確認）。

内閣府国民生活局（2002）平成14年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて

<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital>（2018/1/20参照）。

西村孝史、金マリナ（2010）「企業内ソーシャル・キャピタルの形成要因：「社交意識と互酬・贈与の実態に関する調査」の再分析」、『徳島大学社会科学研究』第23号、pp.51-71。

穂積和子、福德貴朗、錦織孜（2016）「勤労者のグループ活動の特性に関する実証研究」、日本情報経営学会、第73回大会予稿集、151-154頁。

参考資料1 大学生に対するアンケート

前書き：

みなさんは「絆」という言葉を聞くと、東日本大震災のような大きな災害が起こったときのことを思い出されると思います。私達は、「絆」というものを「人と人」、あるいは、「人と集団」との間に生成されるものと考えております。このような絆がどのように形成されるかについて調査しております。お答えいただいたアンケートは集計目的のみに利用いたしますので、協力くださいますようお願いいたします。

問1	【属性について】 性別について
問2	あなたは、現在、大学に1週間に、何日、通学していますか？
問3	【他人への信頼について】 あなたは、一般的に自分の周りにいる人（友人・知人・職場・地域）の人と信頼関係を築きやすい方であると感じていますか？
問4	あなたは「旅先」や「見知らぬ土地」で初めて出会う人に対しては信頼関係を築きやすい方であると感じていますか？
問5	【日常的な付き合いについて】 現在、ご近所で付き合い合っているひとの数はどのくらいですか？
問6	あなたは大学の友人や知人と、授業日として大学に来る以外に、友人と「会って話をする」ことがありますか？
問7	あなたは大学の友人や知人と、「情報通信機器を使って」話をしたりメールを送受信するなどのコミュニケーションをとることがありますか？
問8	あなたは問7で答えたコミュニケーションの手段として、どのような情報通信機器やソフトを利用していますか？最もよく使うものを2つだけ選択してください
問9	【グループ活動について】 あなたはどのような「グループ活動」に参加していますか？ 以下のグループで現在所属しているもの、また過去に所属していたもの、すべてを選択して下さい。 (1) 体育系クラブ・サークル (2) 文化系（文化・学術・工学系）サークル (3) 学内のボランティア活動グループ (4) 学外のボランティア活動グループ (5) 学外の文化系（趣味など）のサークル (6) 学外の体育系のサークル (7) SNS（ソーシャル・ネットワークサービス、FaceBook、Mixiなど） (8) 出身に関するグループ（県人会、など） (9) 学校に関するグループ（例：同窓会、同期会、など） (10) 地域に関するグループ（例：自治会、など） (11) その他
問10	問9で所蔵しているグループについて、あなたが一番「絆を感じるグループ」について「1つ」だけ選択してください。
問11	ここからは、その選択したグループ活動について質問していきます。 そのグループの活動頻度について教えてください。
問12	そのグループの全体の人数はどの位ですか？
問13	そのグループの目的や目標は明確になっていますか？
問14	そのグループへの参加のきっかけはどのようなものですか？
問15	そのグループへはどのくらいの期間、所属していますか？
問16	そのグループで、「一緒に」活動している方はいますか？
問17	そのグループには入会や会員としての費用は必要ですか？
問18	そのグループをオーガナイズする世話役はいますか？
問19	そのグループ活動中のメンバに対して「尊敬の念」を持ったことがありますか？
問20	そのグループのメンバに対して「嫌という気持ち」を持ったことがありますか？
問21	そのグループのメンバに対して「絆」という感情を持ったことがありますか？
問22	そのグループを「辞めたい」と思ったことがありますか？
問23	そのグループを辞めたいと思った理由は次のどれですか（複数回答可）？
問24	そのグループに入って「プラスと感じたこと」をすべてチェックして下さい（複数回答可）。
問25	そのグループに入って「マイナスと感じたこと」をすべてチェックして下さい。
問26	あなたはグループの中で、他のメンバと「絆」に関する「プラス」のイメージを感じたことがありますか？
問27	あなたはグループの中で、他のメンバと「絆」に関する「マイナス」のイメージを感じたことがありますか？

Project Paper No.43

問28	あなたはグループの中で、他のメンバーと「結束力を強める」ために、どのようなことが1番、重要とされますか？
問29	【「絆」という言葉について】 あなたは今までに、次の人たちに対して「絆」や「連帯」を強く感じたことがありますか？そのレベルに合う欄を選択してください。
問29-1	(1) 親子
問29-2	(2) 兄弟姉妹
問29-3	(3) 親戚
問29-4	(4) 親友
問29-5	(5) 昔からの友人・知人
問29-6	(6) 大学の学生時代の友人
問29-7	(7) 小中高の学生時代の友人
問29-8	(8) 学生時代の恩師
問29-9	(9) アルバイト先などの職場の同僚
問29-10	(10) グループ活動のメンバー
問29-11	(11) 近隣の知人
問30-1	あなたは「絆」を大事だと思いますか？
問30-2	あなたは「絆」を思い出したくないと思いますか？
問31	あなたは「絆」という言葉を聞いたとき、以下の言葉を想像しますか？
問31-1	(1) 信用
問31-2	(2) 信頼
問31-3	(3) 安心
問31-4	(4) 安全
問31-5	(5) 仲間
問31-6	(6) 親子
問31-7	(7) つながる
問31-8	(8) 心強い
問31-9	(9) 楽しい
問31-10	(10) 嬉しい
問31-11	(11) 親しみ
問31-12	(12) 幸せ
問31-13	(13) 協力
問31-14	(14) 助け合い
問31-15	(15) ボランティア
問31-16	(16) 付き合い
問31-17	(17) 糸口
問31-18	(18) 煩わしい
問31-19	(19) 面倒くさい
問31-20	(20) 嫌な
問31x-1	あなたは「絆」を次のように感じたことはありますか？ (1) 人生にとって大事な物
問31x-2	(2) 思い出したくない物
問32-1	あなたは今までに「強い絆」を感じたことはありましたか？ それはどのような時でしたか？ もしあれば、いつ、どこで、何をについて記入して下さい。 (1) いつごろ
問32-2	(2) どのような場所で
問32-3	(3) どのようなことについて
問33	【情報通信機器の利用について】 貴方は、パソコンを、自宅で、よく使いますか？
問34	自宅で利用するパソコンの利用の「目的」は何ですか？ 使っているものを全てを選択して下さい。
問35	一番「利用回数の多い」、情報通信機器はどれですか。
問36	その最もよく利用する情報通信機器を1日にどの位の頻度で利用しますか？
問37	その最もよく利用する情報通信機器を1日にどの位の時間、利用しますか？
問38	あなたは「ネット依存している」ほうであると感じますか？
問39	あなたは問38で答えた「ご自身のネット依存の程度」についてどのように感じますか？
問40	ネットで絆
問41	ネットで絆づくり
問42	ネットで絆維持
問43	ネットで絆切れる
問44	生活環境

参考資料2 勤労者に対するアンケート

設問ID	設問文
問1	あなたが現在活動／過去活動されていたグループの内容はどれですか？ 各々該当する項目、全てをお選びください。
問1項目1	現在活動中 (1) 仕事上で必要な知識を学ぶためのグループ (2) 仕事上で必要な人的ネットワークを作るためのグループ (3) 子育てや介護のための知識を学ぶためのグループ (4) 病気や健康についての知識を学ぶためのグループ (5) ウォーキング、登山などのスポーツや健康増進や維持が目的のグループ (6) 絵画制作、楽器演奏、料理、写真、旅行などの趣味のグループ (7) 歴史、文学など教養を向上させるためのグループ (8) ママ友グループなど、子どもを主体にしたグループ (9) 企業の同期会や学校時代の同窓会やクラス会などのグループ (10) 自治会などの地域に貢献するためのグループ (11) ボランティアのグループ (12) 特定のテーマについて議論するグループ (13) その他のグループ
問1項目2	過去活動した
問2	あなたが一番「熱心に」「活動している／活動していたグループ」はどれですか？1つだけお答え下さい。
問3	そのグループで、あなたは現在、活動していますか？
問4	そのグループで、あなたは何年ぐらい活動／活動していましたか？
問5	そのグループにはおよそ、何人ぐらいの会員が活動／活動していましたか？
問6	そのグループにはあなたは、どのぐらいの頻度で活動／活動されていましたか？
問7	そのグループで、あなたは役員や世話役など、人をまとめる役割を果たしたことがありますか？
問8	あなたが一番熱心に「活動している／活動していたグループ」について伺います。あなたは何を目的、または何を期待して、そのグループで活動している／活動していましたか？
問8項目1	自分の能力を向上させる
問8項目2	自分の目標を達成させる
問8項目3	新しい知識や手法を入手する
問8項目4	新しい知人や友人を得る
問8項目5	知人や友人との付き合いを深める
問8項目6	同じ興味や趣味を持つ人と付き合う
問8項目7	自分の興味や趣味を深める
問8項目8	充実した時間を作る
問8項目9	楽しい時間を作る
問8項目10	一人では不可能なことを実現する
問8項目11	他人と一緒にいることで安心感を得る
問8項目12	他人のためになることで満足感を得る
問8項目13	社会のためになることで満足感を得る
問8項目14	身体的な健康を得る／維持する
問8項目15	新しい仕事や将来の方向を見つける
問9	あなたが「目的」や「期待」した項目のうち、「達成」されたことについて伺います。達成されたことや感じたことは何ですか？
問9項目1	自分の能力が向上した
問9項目2	自分の新しい能力を発見することができた
問9項目3	自分の目標を達成することができた
問9項目4	新しい目標を見つけることができた
問9項目5	新しい／有用な知識をえることができた
問9項目6	新しい知人を得ることができた
問9項目7	知人や友人との付き合いが深まった
問9項目8	同じ興味を持つ人と付き合えた
問9項目9	趣味や興味への考え方が深まった
問9項目10	充実した時間を過ごすことができた
問9項目11	楽しい時間を過ごすことができた
問9項目12	一人では不可能なことが実現できた
問9項目13	他人と一緒にいることで安心感を得た
問9項目14	他人のためになることで満足感を得た
問9項目15	社会のためになることで満足感を得た

問9項目16	身体的な健康を得る／維持することができた
問9項目17	新しい仕事や将来の方向が見つかった
問9項目18	自分の活動が会員に認められた
問9項目19	グループ活動が社会で認められた
問9項目20	他の人との強い繋がりを感じた
問9項目21	他の人との弱い繋がりを感じた
問9項目22	生涯の友人を得ることができた
問9項目23	仕事をする上で役立つ情報を得た
問9項目24	仕事をするための人的ネットワークを得た
問10	あなたがそのグループに対して、「不安や不満」に思っている／思っていたことについて教えてください。
問10項目1	グループ活動に活気がない
問10項目2	現在の活動内容が面白くない
問10項目3	目的を達成できそうにない
問10項目4	グループにうまくなじめない
問10項目5	人間関係をうまく作れない会員がいる
問10項目6	課題などの出題の負担でストレスがたまる
問11	あなたがそのグループを「止めるとき／止めたいと思う時／止めた時」の理由は何ですか？
問11項目1	自分の目的や目標を達成したとき
問11項目2	活動内容が目的や目標に合わなくなったとき
問11項目3	人間関係がうまくいかなくなったとき
問11項目4	時間的に活動することが難しくなったとき
問11項目5	グループが活動を終了した／終了するとき
問12	あなたは、会員とは会うことの無い「ネットワーク上だけのグループ」の活動をされたことはありますか？
問13	あなたの性格や現在の行動様式について教えてください。
問13項目1	社交的である
問13項目2	協調性がある
問13項目3	一人で静かにしているのが好き
問13項目4	人の話を聞くのが好き
問13項目5	人の面倒を見るのが好き
問13項目6	誰とでも話することができる
問13項目7	初めての人でも信用しやすい
問13項目8	休日は自宅で過ごすことが多い
問13項目9	対面の会話より、電子会議室やSNSの方が自分の気持ちを表現しやすい
問13項目10	電子会議室やSNSでは、読むだけで、自分から発言しない人が多い
問14	あなたが「普段仕事以外で利用する」コミュニケーション手段について教えてください。
問14項目1	固定電話による通話
問14項目2	はがき・手紙などの郵便
問14項目3	携帯電話による通話
問14項目4	携帯電話によるメール
問14項目5	自宅のパソコンによるメール
問14項目6	スマートフォン／タブレットなどの携帯端末による通話
問14項目7	スマートフォン／タブレットなどの携帯端末によるメール
問14項目8	LINEによる通話／グループメール／チャット
問14項目9	フェイスブック（Facebook）
問14項目10	mixi、TwitterなどのSNS
問15	あなたは現在、一日に平均してどれくらいの時間、「インターネット」にアクセスしていますか？
問16	あなたの性別を教えてください。
問17	あなたの年令を教えてください（平成28年4月1日現在の満年令）。
問18	あなたの最終学歴を教えてください。
問19	あなたの現在の職業はどれですか？
問20	あなたの現在の雇用形態はどのようなものですか？
問21	あなたは今までに転職されたことはありますか？ 転職回数を教えてください（アルバイト／パートを含む）。
問22	あなたの現在の勤務先がある住所の「都道府県名」をお選びください。
問23	あなたの現在の勤務先までの通勤時間はどの位ですか？
問24	あなたの現在の「世帯年収」を教えてください。
問25	あなたは現在、どのような方と一緒に暮らしていますか？ 一緒に住んでいる方すべてをお選びください。
問26	年代